

第八章 先人旧業を留める

開元二十(七三三)年夏。

川がゆるやかに曲がり、奥へ奥へと眺望が深まる。最も遠くに見えて来た山を、身を乗り出して凝視する。

「あれですか。鹿門山ですな」。

孟邕が後ろで言う。

「旅はこれで終わる。こういうことだったのだ」。

口には出さず心の内に言う。南園を出て間もなく五年。最後は長い船路。ここに至れば鹿門山が見えるとわかっていた。二度と鹿門山を見ないでいるということもあり得た。あの山の下に戻って自分はいかなることになるのか。「よかったのでしょうか」。

「君が見ての通りだ」。

「僕が見てですか。そのようにおっしやるのなら、見て差し上げましょうか。こうして後ろから拝見して、どうですか、兄上はさしずめ困っておられます。どう答えたらいいか思案がつかず、困っておられますな」。

「何を答えるのかい」。

「お困りなら、僕が代わりに答えてもよろしいでしょう」。

「誰に答えるのかい」。

「決まっていますではありませんか。このままあそこまで行って、鹿門山が黙って通してくれますか。旅はどうだったと、きつと訊いて来るでしょう。兄上はどう答えるのです。うまく言えないでしょう。兄上と五年も一緒にいたのですから、そのくらいわかります。しかし、何ですな、答えに窮して通してもらえないのを、兄上は望んでいたりしませんか」。

孟浩然が振り返ると、孟盩はにやりと笑う。

「そう思っかい」。

「帰ると決めてここまでは来ました。ところが、鹿門山が通してくれなかったから仕方なく引き返すということなら、それなりに言い訳ができませんよ。しかしですな、鹿門山を見てしまって、再び旅に出られますか。無理でしょう。ですから、ここはうまい答えを見つけて、旅を終わらせるしかないでしょう」。

「それで、君は、どのように答えてくれるのかい」。

「そうですね。少しばかり気取ってこう言ってみますか」。

愁尽而意多 愁いは尽きて意は多し

「どうです。結構うまいとは思いませんか」。

「それを言おうとして、しばらく黙って考えていたのかい」。

「いえいえ、鹿門山が現れた瞬間に、兄上の背中を見て、この句が浮かんだのです。考えてなんかいません。だから、ぴったり当たりましたでしょう」。

「愁いは尽きたのかい」。

「違うのですか。まだあるのですか」。

「そもそも私にはどのような愁いがあったのだろうか」。

「なかつたのですか」。

「君は『意は多し』と言った。意があるからには、まだ愁いの種が残っていないものだ。愁いは尽きたとは言いがたいのではないのかい」。

「たとえ種がまだあったところで、それが愁いになるのは先のことです。旅は終わるのですから、一度はきっぱり尽きたと言いつけておきましょう。山簡だって酔っていつまでも泣いていたのではないのでしょうか。阮籍だって袋小路にはまっていつまでも泣いていたのではないのでしょうか。泣き止んだときには愁いが尽きていたのです。尽きても意は多い。そういうものではありませんか」。

「山簡がまた池に行き、阮籍がまた袋小路を求めたように、私はまた旅に出るのかい」。

「どうでしょうか。兄上は山簡でも阮籍でもないのですから、同じことではないでしょう」。

それは旅の一つの結論とも言えようか。

「私は様々な人を追い求めたようだ。謝霊雲でも陶淵明でもなく、魏元忠様でも龐徳公でもないのは、もとより自明だった。結局のところ、私は南園の孟浩然だ。だから、旅を続け、帰って来た。南園の孟浩然でなければそうはしない」。

孟浩然は懐を押さえる。そこに弟の手紙がある。永嘉で受け取り、旅を終えろと決めた。

「一生に一度の命を懸けた駆け落ちも、結末は大概このようなものなのでしよう。巡り巡って元に戻るのですな」。

孟浩然は船べりを叩き、

愁随江路尽　　愁いは江の路に随って尽きました

意入郢門多　　意は郢(えい)門に入ってからも多くあります。

子盦の言葉を詩句に直す。郢門は襄陽の南東三百十里、先に通過したところだ。

「君に任せる。鹿門山にうまく答えてくれ」。

旅は終わらせる理由が懐の内にある。

南園に事情を奇妙な書き方で弟は知らせて来た。人の名が列挙され、下に数個の文字が添えられている。最初が母で「一尺曲げて耕す」。腰がさらに折れ曲がったということであろうか。次が雲表觀主で「九州に墓誌なし」、その次が張野人で「碑は川より七間」。雲表觀主との再会は叶わないとの覚悟はかねてよりあり、張野人とは旅に出る前にこれ限りとの予感があった。

褚先生には「その間に必ず名ある者あり」。孟子の言葉だ。孟子は斉の宣王に期待して熱く王道を説いた。孟子の理想は宣王に理解されなかった。斉の国を去る孟子は憂愁に沈んでいるように見え、弟子は先生を慰めた。「私は憂いてなどいない」。孟子は怒ったように答えた。「歴史を見れば、五百年に一度、必ず王者が現れる。その間の時期には、必ず優れた者、名ある者が出る。天はいまはまだ平和な世を望んでいないかのようだ。しかし、いまでも平和が実現するとすれば、その任につくのは必ず私だ。私はそれを知っている」。

褚先生も「名ある者」であろうとし、南園から「名ある者」を世に送り出そうとの情熱は衰えていないと、弟は言うのだろう。

弟自身の名は最後から二番目。「一朝の患いあり」。これも孟子の言葉に拠る。「君子には終身の憂いはあつても、一朝の患いはない」。君子には、生涯をかけても古の聖人に及ばないという憂いがあるけれども、日々の小さな患いはない。弟は、それとは逆に、日々を心を砕く憂いがあると言った。

最後は孟大。そこに添えられた文字は「吐瀉八斗」。孟大は病気で、それが「一朝の患い」のものであるのだろうか。

手紙が来たときに孟邕は言った。「ここには郊君の名がありません。してみると、郊君が十五郎兄さんに頼んだのでしよう。手に余る大事のときは、七郎兄さんと十五郎兄さんに相談せよと兄上が言い置いた通りにしたのですな。七郎兄さんが、手紙を襄陽の孟家に持ち込んだのでしよう。これで帰れずにはいられなくなりましたな」。

孟浩然のもとにその手紙をもたらしたのは、襄陽の孟家の店の者だった。

旅の途中で幾日か揚州に滞在し、思うところあって孟郁を訪ねた。不在で会えず、「これより長江を渡って南を旅する」と言い置いて去った。孟郁の商売の網は、孟浩然の旅の行き先を正確に捉えた。

弟の手紙は南園に帰ると決めた唯一の理由ではない。それでも、手紙が来なければ依然として南園に帰ろうとはしなかっただろう。

孟邕は、

「しかしですな、兄上から任せれますと、なかなかに重大な任務です。自信がなくなります。怖気づいて口がきけなくなるかも知れません。早くも体が震えて来そうです」。

「まさか、君はそんなにやわではあるまいに」。

旅の間に孟邕は随分と変わった。同じ歳月でも、若い者とは意味合いが違うのだろう。

「僕は見かけ通り、口先は達者で、小心者です。雄弁であって内実を伴わないのを、鹿門山にはすぐに見抜かれてしまいましたよ。ここで引き下がりがた

い気分です。船頭に言って艀を止めさせれば、舟は流れに乗り、元に戻って行きます。江南の地に引き返して、もう一度、天台山に登り直しませんか」。

「君は底意地が悪い。鹿門山を前にして、わざと迷わせようというのかい。それならそれでいい。迷うのも君に任せる。君がそうしようと言うのなら、天台山にも登ろう」。

「本当ですか」。

「今回の旅は初めから君次第だった。君の思うように連れ回されただけだ」。

「とんでもないことおっしゃいますな。連れ回してなどいません」。

「長安から襄陽に帰らなかったのも、洛陽から揚州に下ったのも、揚州から江南に行ったのも、天台山に登ったのも、永嘉に行ったのも、君が行こうと言ったからだ。こうして帰って来たのもだ」。

「兄上が望んでいる通りのことをしたまです」。

「私は何か望んでいたのだろうか」。

「兄上の望みを聞きたいですか」。

「ああ、頼む、聞かせてくれ」。

孟邕は小さく思案し、船端を叩きつつ大きく詠じる。

然而無有乎爾　しかしして有ることなければ、

則亦無有乎爾　また有ることならん。

「兄上の望みは、これでしよう」。

「大それたことを君は言うものだ」。

「これで違わないはずです。僕は知っています」。

これも孟子の言葉だ。

孟子は、歴史の大きな流れを顧みて、太古の聖人の時代から、五百年を四つ重ねると自分に至ると勘定した。その二千年を孟子は長いとはせず、太古の聖人はなお近くにいと考えた。歴史のそのような流れに位置する自分であるのだから、「有ることなければ」すなわち「聖人の教えを私が伝えるのであれば」、「また有ることならん」すなわち「聖人の教えは後世に伝わらない」と孟子は言った。孟子は自身に課せられた任務をこのように宣言した

のだった。

その孟子から、五百年をまた二つ重ねたのがいまだ。子盦が言いたいのは、孟子の教えを受け継いで来た南園の伝統を、ここで自分が伝えようとしなければ、恐らくは絶えてしまう、南園に生まれた者の任務がそこにあるということなのだろう。

「君がそうだと言うのなら、そうなのだろう。君に連れられての旅だった。だから、最後まで君に任せよう。それとも、最後まで自分は自分で決めるべきかい。君はどう思うかい」。

「それも僕に訊くのですか」。

「それしきのことさえ決められない私だ。これから先もずっと君に頼ることになりそうだ」。

「それはもう勘弁して下さい。いつまでもやり切れません」。

子盦は笑う。

子盦には孟盦の人生がある。そのうちの五年を自分ために使ってもらった。

これ以上は許されまい。旅を終えるべき理由はそこにもある。

陸に上がって郷里の土を踏む。岨山が真正面にある。

いくばくかの錢を船頭に渡そうとする。

「これはいけません。旦那様からは決して頂戴してはならぬと、きつく言われておりますのでございます」。

「わずかだ。遙々来てくれたことに対するせめてもの気持ちだ。そのように遠慮されると、こちらが恥ずかしくなるくらいわずかだ」。

「多い少ないではないのでございます。こんなあつしですけれど、向こうでは正直一途で通っております。それだけが取り柄なのでございます」。

船頭は手を払って舟に戻ろうとする。

「正直を通り越して、かなりの強情者ですな」。

子壺が笑う。

「あつしは強情などではございませんのです。いつでも旦那様方のお言い付けの通りにするだけでございます。あちらを出ましたときに、皆様方からたんまり頂戴したのでございます。余分なものは一切ただけなのです。強情でも何でもないでございます」。

「こればかりではないか。ここで受け取ったところで誰にも知られない。構わないだろう」。

孟浩然は歩み寄ってなおも渡そうとする。

「誰にも知られないどころではありません。天が見ております。川が聞いています。何より、この舟に顔向けできません」。

怒ったように言い捨てて舟に飛び乗る。

「待ってくれ、待ってくれ。私が悪かった。これは引つ込める。謝るから、舟は出さずにいてくれないか。そなたには、もう一つだけ頼みたいことがある。御苦労だが、向こうに帰るついでと言つては何だが、あちらの方々に手紙を届けてはもらえぬか。使いの者に後で持つて来させよう。すまぬが、こ

ここでしばらく待つていてはくれまいか」。

船頭は振り返つて顔を緩め、

「旦那様が謝るなんて、とんでもございません。お手紙でございませうか。それをお預かりできれば、ちゃんとお送りした証となります。それはありがたいことです」。

「そうかい、そうしてくれるなら大いに助かる。手紙はすぐに書こう。ただ、ここには何しろ五年ぶりに帰つて来た。もしかするとすぐには書けないかも知れない。明日の朝になつても構わないかい」。

「特段、帰りを急ぐものでもありませんので、どうぞゆっくりなさつて下さい」。

「ひよつとすると、明日の夕方になるかも知れない。それでもいいかい」。
「お手紙を戴けるまで、いつまでものんびりとお待ちします」。

「では、そうしておくれ」。

江南の人々が特に選んでくれた船頭は忠実に任務を果たしてくれた。旅の

費用の全てを江南の人々が用立ててくれた。船頭に渡そうとしたのはその残りだ。

南園への道を歩み出す。

孟浩然の背に、孟邕がささやく。

「帰りの道すがら、食べたり飲んだりするようなものなら、受け取らないでもないでしょう。お手紙と一緒に船頭に渡すようにしましょう」。

「そうだな。君に任せるからうまくやってくれ」。

旅は常にこのような調子で、何事も孟邕任せだった。

「しかしですな、ああして船頭を残したのは、お手紙ばかりではないのですよう」。

「あちらの方々には謝礼を言わねば失礼だろう」。

「兄上自身がお礼を言いに行くという手だつてありませんよう」。

「そうするのがいいと君は思うのかい」。

「僕にはもう訊かないで下さい。旅は終わったのです。違いますか」。

「君が終わったと言うのならそうなのだろう。君がいなければ、このようには決してならなかった」。

「僕がいなかったら、ひよっとして、立派なお役人様になって、都から馬に跨り、従者の十人ばかりも連れて、胸を張って帰って来ましたかな。それを迎える僕は、兄上の顔が眩しすぎて、まともに見られなかったでしょうな」。「君とともに都に向かったときに、すでにこうなると定まっていたのだろう」。

「兄上がそれを望んでいたでしょうな」。

「いまの私は何を望んでいるのだろうか」。

「同じことをまた僕にお尋ねになるのですか」。

「あまりの意の多さに私はとまどっている。あそこにはさらに意を多くするものがある」。

川より七間という距離に、一本の木碑がある。そこは張野人の小屋があった場所だ。

木碑は張野人の棹だ。張野人がいつも握っていたところに触れる。

人有上皇風 遠く古の人の風情有りました。

五つの文字が刻まれている。孟郊が選んだのだろう。

木碑から離れ、岷山の遠景の前にそれを置く。岷山は宇宙の初めからあったと羊祜が言った。張野人は、陶淵明と同じように、何千年も前の昔の人と同じでありたいと思っていた。上古から幾千年の間、張野人のような人は幾人いただろうか。宇宙の初めから数限りない人がいたが、張野人はきつとただの一人だろう。

ここに帰って来た自分に、張野人は何と言うだろうか。今度はどのような挑発するだろうか。

木碑の文字をもとに一篇の詩を詠む。

与君園廬並 君の廬と我が園は隣り合わせで

微尚頗亦同 日頃思うところもまた同じでした。

耕釣方自逸 耕しても釣りをしても好むにまかせて

壺觴趣不空 酒の趣きもよろしいものでした。

門無俗士駕 門に俗人が訪れることはなく

人有上皇風 遠く古の人の風情がありました。

何必先賢伝 なかなかどうして先賢伝に記された

唯称龐徳公 龐徳公ばかりが称えられていいものではありません。

木碑の脇で長く感慨に耽っていたい。五年ぶりに帰って来て思う事は多すぎる。今日これから待っている事も多いに違いない。

南園に向かつて歩む。

まだ中天には昇っていなくても夏の日差しは強く、あたりはすでに蒸し上がっている。久しぶりの襄陽は、江南の地とは違う匂いがする。

子盦がひよいと前に出る。

「兄上、歩くのが遅すぎます。いまさら躊躇してどうするのですか」。

「躊躇などしていない。旅はきつぱり終わった。遅いと君が感じるのは、長い間の船旅で、いささか足が萎えたせいなのだろう。それに、病氣もしたのだから」。

孟浩然は足や腰を叩く。

「船旅ですと。兄上は舟に乗っていたのですか。ぐずぐずしている言い訳としては、ひどく見え透いた嘘を言いますな。僕の記憶では、昨日も兄上と一緒に、ちようどここを歩いていました。船旅などあるものですか」。

「何を言ひ出すのかい」。

「昨日のことですから、はつきりと覚えています。忘れたのですか。ほら、この石です。これは昨日は道の真ん中にあつたのです。それを、兄上がひよいとつまんで脇に置いたではありませんか。ほら、こいつを忘れたとは言わせません」。

孟邕は足元から拾い上げ、鼻先で匂いを嗅ぎ、

「兄上の指の匂いがします。否定しようがありません」。

「それは、叔父貴の真似かい」。

「違います。おじさんと違って、僕は明らかな事実を確認しているだけです。千年の眠りを醒ましてやると、石に向かつて兄上は言いました。他にも石は

あるのに、どうしてこれを選んだのですかな」。

子邕が差し出す石を手に取り、

「君がそう言うのならそうだったのだろう。成程、昨日のこの石か。どうしてこれを選んだのか、君はわからなかったのかい。見て、一瞬でわからないかい。これが最も苦悩に満ちているからだ。石にだって気まぐれがあつていい。さあ、転がりたいところに行くがいい」。

孟浩然は投げ上げる。

その行方を見届けずに、子邕の前に立とうとする。

「競争なら負けません」。

子邕は走り出す。

孟浩然はその背を追う。旅は常にこのような調子であった。

孟邕とともに襄陽を発って長安に着いたのは、開元十五（七二七）年の暮れ。

かねてから詩を通じて知る人々は、突然の上京に驚き、その目的を聞いてさらに驚いた。「何とか力になりましょう」と言っただけはくれたが、実を結ぶ言葉ではないと瞬時に知れた。

翌春の貢奉の本試験を受ける資格は孟浩然にはなかった。何らの事前運動もなしに上京して特別な優遇処置が与えられるはずもない。たとえ試験を受けられても、王維のように貴人達の後ろ盾がなければ、合格は難しい。まして受験すらせずに官人になるのは、宰相級の高官ないしは皇帝自身に引き上げてもらう以外にない。

頼るのは詩だった。孟浩然の詩で最も知られていたのは岳陽楼で張説に贈ったものだ。その詩の後半を悔やんだこともあった。再びそれに命運を託した。数多くの人々と交わり、詩を贈答し合った。おしなべて皆は感心してくれた。しかし、表面上は賛辞であっても、憐れみないしは蔑みさえもが込められていた。

地方の者が都に出て試験を受け、あるいは猟官運動をするのは一大事業で

ある。一家の財産を擲っても足りなければ、将来を担保に金持ちの援助を受ける。孟四が試験に挑んだときは孟演に助力を仰いだ。孟浩然は、長安に着くまでの路銀しか持たずに南園を発った。南園の経済は厳しく、だからこそ都に出なければならなかった。

詩友より贈られるもので食いつなぎ、あるいは詩友のもとを転々とした。歓待してくれる人もいれば、そうでない人も多かった。孟邕は初めての都であつたにもかかわらず、上手に様々な工面をしてくれた。

しばしば仏寺に滞在した。鹿門寺に籠っていた孟浩然であるから、寺とは相性がよく、寺で詩を詠むと、人々は偽りなしに称賛してくれた。人々が喜ぶのは、鹿門山の隠士としての孟浩然の詩であつた。

一部の人は孟浩然の行動を理解してくれた。王維はその一人だ。王維は貴人に可愛がられるよう懸命に努力して貢挙に合格した。それでも、官人になつてから枢路の人々の不興を買い、一時期は地方に放出された。鹿門山の隠士の名に自ら泥を塗らねばならないのを王維はわかつてくれた。

最大の頼みの綱は張説だった。張説にようやく会えたのは、貢挙が終わって、合格者と落第者で大きく運命が分かれた後の、開元十六（七二八）年の晩春だった。張説はその直前に官界から引退し、「もう私の時代ではない」と、息子の張均に引き会わせてくれた。張均は親の威光もあつてつとに貢挙に合格し、順調に出世の道を歩みつつあった。一見して、子は父の優れたところ以外をより多く受け継いでいた。その張均に孟浩然は驚くべき詩を贈った。

公門世緒昌

あなたさまの家は世々功業がさかんである上に

才子冠裴王

あなたさまはあまたの名族の中でも冠たる才人でありま
す。

齒の浮く美辞の羅列だった。張均は満足の体であった。帰路、孟邕は「兄上は、御自分の名を徹底して貶めるために都に来たのですか」と言った。「媚び諂い求める者の前ではそうするしかあるまい」。

都は心に適う場所ではなかった。初めから袋小路に跳び込む気でした。都には俊英が集い、互いに才を競い、新たな詩を生み出そうとしていた。

鹿門山の隱士の詩は、都での流行から隔絶しているところに価値があった。しかし、孟浩然是正真正銘の隱士ではない。苦しい南園を背負う人間だ。隱士ではない孟浩然の詩は歓迎されない。媚び諂いの詩で、憐憫と蔑みに身を曝すのがよい。

長安滞在が一年に近づきつつあった秋に、襄陽に帰るとの決意を、詩に託して心ある人々に伝えた。人々は帰郷のための費用を用立ててくれ、開元十七（七五）年一月、都に別れを告げた。孟邕は全てを見抜いていた。門の外に出て、孟浩然是東と南を指差し、「君ならどちらを選ぶかい」。「はあ、僕が選ぶのですか」。「この一年余り、さんざん君の世話になった。最後まで僕は君の気持も聞いてみなければ悪いだろう」。「僕の気持ですか。でも、聞くだけなら答えたくありません。僕の言う通りにするのなら、東か南かを選んでみせましょう」。「君に任せると言えばいいのかい」。「いちいち訊かずに決めて下さい。だって、そもそも僕がどうして兄上のお供をしまここにいるのか、兄上はよく御存知のはずではありませんか」。「南園と出るときに一

緒に来てくれと頼んだからだろう。「お忘れなのですか。僕は、兄上の駆け落ちをお手伝いすると言ったのです」。「なんだ、そのことか。どれほど美しい神女でも、私は鄭交甫のように惑わされたりしないのは、この一年の間に君にもよくわかったのではないのかい」。「都の艶めかしい妓女は兄上の関心外です。しかし、駆け落ちの相手は美女であるとは限りませんでしょう」。「ほう、だったら誰なのかい」。「答える前に、任せると言って下さい」。「わかった、わかった。君の言う通りにしよう。駆け落ちでもいいから、任せよう」。「ならば、いよいよ兄上は駆け落ちと決まりました。お相手は他にあるものですか。いいですか、詩です。行くのは東です」。「ああ、そう言うことかい。東なのかい」。「襄陽には帰りません。ひよつとして永遠に」。「君は、何かい、こうするようと、叔父貴に言われて来たのかい」。「いえ、兄上が東を選んだのです」。「そのようなことを私が言ったかい」。「兄上が何も隠さないだけです」。「それも叔父貴の真似かい」。

洛陽に繋がる東の道を歩き出した孟浩然の耳に、褚先生の声が聞こえた。

「時よ時、再びは来らず」。ここで襄陽に帰らないのは、貢奉の合格者を出すという褚先生の一生の仕事に反するものだ。詩と駆け落ちをするのはこの時をおいて他にない。時を失うのは褚先生の教えに反する。

詩との駆け落ちは、すなわち、一筋の道を求める旅だ。洞庭湖の上に消えた道はどこに繋がっているのか。かつて嵐の山で最初に予感した通り、尋常でない心になって惑うてたどる道だ。恋に狂った駆け落ちと同じだ。故郷を棄てて恋に走る。陶淵明とはまるで逆だ。その旅に出るには、都に出て自分を、自分の詩を貶める必要があった。ひたすらに惑うて一筋の道をたどった者は過去にはいない。だから自分が行く。

駆け落ちは愉悦の日々であり、苦悩の日々である。恋の成就が身の破滅という末路を選ばずにすんだのは、孟嘗という導き手がいたからであり、唐が極盛期を迎えつつあったからでもあった。日々を生きるための諸問題は孟嘗が解決してくれ、豊かになった社会には、旅する二人を受け入れる余裕があった。洛陽でもどこでも、その日の宿と飯を、出会った人々が世話をしてく

れた。孟邕と二人だけであるから、少々の食べ物と、横になれる場所があれば十分だった。携えるのは詩だ。飄然と現れて、詩の一篇を残して飄然と去る。そのような旅をすることが、一筋の道を辿ることになるのかどうかはわからなかった。

唐朝は財政を完全に建て直し、封禪を成し遂げた後も、国庫には使い切れない金帛が溢れた。孟浩然が洛陽を出て揚州を経て江南の地に向かいつつあった開元十七（七三〇）年の春は、都ではあまりにも事がなく、皇帝は百官に特別の使命を授けた。十日の休みと多額の遊興費を与え、景勝地を選んで遊宴するよう命じた。宰相以下の高官は十二箇所に分かれて興を尽くし、皇帝は花萼楼にお出ましになって帰って来る人々を出迎えた。

このような時代に生まれ合わせ、気儘と見られる旅ができるのは幸運以外の何物でもない。それだけに、心を暗く塞ぐものがあつた。駆け落ち者は、世のはみ出し者だ。南園の再建にも、天下の民のためにも、何一つとして益になることをしていない。それ自ら選び、苦しみの種とした。都での日々が

心に適わず、旅に心を惑わせ、心を悩ませば、自ずと体に響く。十年ぶりに病が再発し、洛陽でしばらく病臥した。

恋の煩惱からすっぱり抜け出る別の道はある。顔五のように仙界を求めるか、雲表観主に断られた仏弟子になるかだ。洛陽から長江を渡って南を旅し、「ここまで来て天台山に登らないではいられますまい」と、孟邕に見抜かれた。かねてから心とは何かを窮めなければならぬとの思いがあつた。天台山に幾度も登った。法門に数多くの友人ができたが、本当の仏弟子になるのは雲表観主の元でなければならなかつた。

駆け落ちは続き、一筋の道は見えなかつた。旅のままに人生を終えることもありえそうだった。

開元十九（七三二）年の暮れ、楽城という小さな町で張子容と再会した。初めて官職に就いた張子容を見送ってから十七年の歳月が流れていた。張子容には高い志があり、清廉すぎて敬遠され、低い官職のまま地方を転々とし、職務上のわずかな失敗を咎められて楽城に追いやられた。

予是乗梓客 　私は筏に乗る旅人としてここに来て

君為失路人 　君は不遇の人としてここにいます。

旧い友人同士は即座に互いの心を理解した。

張子容と会っていささか気が緩んだせいか、また病に伏せ、そのまま春を迎えた。

病中に一つの決心をし、暖かくなるとともに病が小康を得ると、張子容と別れて永嘉を訪ねた。謝靈雲所縁の地だ。一筋の道は、謝靈雲の詩をもって張野人に挑発されたことから始まった。永嘉で一筋の道を見出すことができなければ、旅のどこで見出せるのか。そこに、弟からの手紙が届いた。

子邕に帰郷を促されたとき、張子容が現れた。孟浩然を追って来たのではなかった。よく思わない人々に弄ばれるかのようにして張子容は別の土地に動かされたのだった。張子容はいかなる不遇に置かれても、鹿門寺を出たときの思いのまま、天下のため民のために身を捧げる考えを保持し続けていた。隆盛の極みのようないまを、張子容は真剣に憂慮していた。そのようなこと

は孟浩然是考えもせず、都でも聞かなかつた。張子容は朝廷において活躍すべき人間であり、自分はもとよりそうではないと、孟浩然是思った。

張子容は鹿門寺を出たときと同じ助言を孟浩然に詩で示した。

以此為長策　ここに最もよい策を提案しよう

勸君帰旧廬　君に勧めるのは、郷里に帰ること。

醉歌田舎酒　田舎の酒に酔って歌い

笑読古人書　古の人の書物を笑って読みたまえ。

南園においてこそ自分にはすべきことがある。南園に戻らなければ、自分は孟浩然たりえない。孟浩然是張子容の長策に従うと応じた。

旧国余帰楚　この旧い国より私は西に帰り

新年子北征　この新たな年に君は北に行きます。

心はずでに決まっても、苦悩と愉悅が混在する旅にはなお未練があつた。

孟邕は「駆け落ちの相手はもはやここにはいないのに、どうしてためらうのですか」と、さっさと帰り仕度をして、孟浩然を舟に押し込んだ。

しばらく先で待っている孟篋に追いつき、流れる汗を拭いつつ、

「昨日もこの道を歩いたのだったら、今日のいまに限って特に急がねばならない理由はあるまいに」。

孟篋は涼しい顔で、

「兄上も、やっと、昨日のことを思い出してくれましたな。今日も昨日も一昨日も、ここを歩いているのです」。

「そうだな、いつもの歩き馴れた道だ」。

五年間の空白などなかったような気がする。それが故郷というものなのだろう。

「とは言えですな、いつも同じという訳にもいきませんでしょう。この世に変わらないものはありませんからな」。

「それはまあその通りだ」。

「あそのこの瓜畑だって昔は林だったのでしょう」。

「あれは卜爺さんが一人で切り開いた畑だ。いまは息子の代だ。ひよつとしたら、五年の間に孫の代になっているかも知れない」。

「瓜は、そろそろいい具合に稔っているのではありませんか。卜爺さんが作っていたころの瓜は格別だったと、うちの親父さんはよく言います。五色の瓜があつて、それによって、酒が五倍は旨くなつたと。息子の代になつて少し味が落ち、酒の味はせいぜい三倍だそうです。それだって、旅の間に食べたどの瓜よりも旨い。あの瓜には『南陵の瓜』とか、ちゃんとした名を献上すべきですな」。

「それは『東陵の瓜』のもじりかい。卜爺さんは、『東陵の瓜』の故事を知つていて、あそこに瓜畑を拓いたのだろうか」。

「卜爺さんは褚先生と仲がよかつたらしいです。教わつて知っていたとしてもおかしくはないでしょう」。

「褚先生とかい。それは初めて聞いた」。

「うちの親父さんが言うことですから、大して信用はできません。先生がたまに気を抜くのに、ト爺さんはよいお相手だったらしいです。子孫のために、橘を植えるのがいいのか、瓜を植えるのがいいのか、どちらがいいのかと、ト爺さんが先生にお尋ねになったとしても不思議ではないでしょう」。

「衡叔平（こう しゆくへい）を選ぶか、邵平（しょう へい）を選ぶかということかい」。

「兄上なら、どちらを勧めますか」。

「衡叔平は我が襄陽の人、邵平は長安の人だから、ここは衡叔平の肩を持ちたいところだが、先生がト爺さんに瓜を勧められたのなら、私も邵平を選ぶか」。

衡叔平は自分の家を立派に飾りたいと常々思っていた。妻はそのような贅沢を許さなかった。ならば何か他のものを子孫に遺したいと、衡叔平は妻に内緒で千株の橘を植えた。死に臨んで子呼び、「おまえの母が家をよくするのを嫌ったために、この家はこのひどいさまだ。しかし、実のよく成る千株

の橘を植えておいた。実を売れば、年に一匹の絹にはなるだろう。おまえたちはそれで衣食にことかかずに暮らせるはずだ。千株の橘は千人の使用人に匹敵するとして「千頭木奴」と呼ばれる。その言葉に由来する物語が各地に伝わる。

邵平は秦の始皇帝に仕える高官だった。あるとき地位も名も棄てて姿を消した。始皇帝が死ぬと瞬く間に秦は滅び、漢の世になった。漢の都の長安で、時季になると、一人の老人が現れてまことに美味な瓜を売った。あまりの旨さに、都の人が老人の後を付けていくと、長安の東の丘陵に瓜畑があり、よくよく尋ねると、その老人が邵平だった。邵平の瓜は「東陵の瓜」として、長らく長安の名物となった。

「先生の弟子としては、先生の教えに忠実にということですか」。

「まあ、不肖の弟子ではあるが」。

孟浩然は苦いものを感じる。

「兄上の汗もおさまったようですから、行きますか」。

丈高く茂った草の間を、先ほどよりはゆっくりと歩む。

孟邕が不意に伸び上がって、

「見て下さい、あれは何をしているのでしょうか。あそこです」。

孟浩然の胸が高鳴る。昨日もこの道を歩たような気がしても、旅の歳月は確かに存在する。ここは例の場所だ。孟邕に言われるよりも先に、丘の縁を見ていなければいけなかった。孟大が一人で立つ場所に、十人ばかりの人がいる。

「十五郎兄さんではありませんか」。

若い孟邕には見えるのだろう。孟浩然の目では弟がいるとまでは識別できない。

孟邕は道はずれて草をかき分け、跳び上がって腕を振る。向こうも気づいて応じる。

孟浩然の背に冷たいものが流れ落ちる。孟大にとって特別な場所に弟と大勢の人がいるのは尋常ではない。

孟邕は振り返り、

「やはり十五郎兄さんです。あんなところで何をしているのでしょうか。」

孟浩然は、あることを思つて、

「いや、違つ。」

と、否定する。しかし、それは打ち消し難い。

丘から弟が猛然と駆け下り、孟邕の脇を抜け、荒い息で兄の前に立つ。固

くこわばつた顔は、久しぶりの再会を喜ぶものではない。

「帰つて来た。」

兄は小さく言う。

「手紙が届きましたか。」

「永嘉で受け取つた。それですぐに帰つて来た。しかし、時間がかかりすぎ

たのかい。」

弟の顔が歪む。

「そうか、遅すぎたのか。」

弟はうなずきかけて、途中で止め、

「いえ」。

「違うのかい。だったら、あの者たちはあそこで何をしているのだ」。

弟は困惑した表情で、

「それは明日の朝です。そのための準備なのです」。

弟は多くを言わない。

横に立つ孟邕はすでに了解していて、

「一郎兄さんがあの場所を望まれたのですか」。

弟は黙ってうなずく。

孟浩然は、孟大がかつてあの場所に立っていた姿を思う。これからは永遠に一人でそこにいようと決めたのか。

孟大が好んだ場所に上る。

孟浩然の前に、人々が悄々と頭を垂れる。

「長い間、離れていてすまなかった」。

孟浩然は詫びる。

「旦那様がお帰りになって下さりさえすればもう安心でございます」。

一人がそう言うと、互いにうなずき合う。その顔ぶれを見れば、孟家の者であれ、他姓の者であれ、いずれも弟がものを頼みやすい人たちだ。南園の他の人々は、恐らく、同じように言ってはくれないだろう。

大きな矩形の穴が掘られている。縁に立って中を覗く。土の匂いが立ち昇る。孟大はここに入ってようやく安らぎを得るのか。

孟大には何も告げずに旅に出た。船から陸に上がる前に、孟大に何を言うのかほぼ決めていた。二十数年前に「俺の後に付いて来ようとするな」と孟大は言った。十二年前に従兄弟同土二人でともに歩もうとした。これからは、孟大に代わって自分が歩む。少なくとも孟郊が独り立ちできるまで、自分がそうしなければいけない。

孟大はすでにいないのだと、この穴の存在によって知らされても、まだ受け止められていない。悲しみがどこか奥底深くでうごめき始めていると感じ

はしても、心は虚ろで、孟大に告げようと用意していた言葉はどうなってしまうのかと、考えなくてもいいことを思ってしまった。もしも孟大が病から脱していれば、それは言う必要はなく、そうなることを望んでいた。自分はいわば南園を棄てて勝手気ままな旅をした。孟大がいない南園に帰って来て、言えるような言葉が自分にはあるのだろうか。

「明日の朝なのかい」。

すでに聞いたことを尋ねる。

「日の巡りから明日になりました」。

「そうかい、明日の朝なのかい」。

穴の底に目を凝らす。実際にはさほど深くはないのだが、夏の日差しが及ばない先は暗い別の世界のような。孟大に言おうとしていた言葉は行き先を失い、それを吸い込もうとするかのように、穴は真つ暗な奥行をゆらゆらと増していく。孟浩然是切り立った暗黒の崖の縁に立っている。孟大がひらりとそこに身を投じる。止めなければならぬ。地面のあちこちに亀裂が走り、

孟浩然の足は踏み場を失う。

孟大が嘯く声が聞こえる。しばらく抑揚だけが響き、ようやくに一語を捉えられると、意味のある言葉になる。

曖曖遠人村　ぼんやりと遠くにかすむ村

依依墟里煙　ゆらゆらと昇る人家の煙。

孟浩然の胸が強く締め付けられる。

首を上げると、前に草の原があり、その先に河原があり、漢水の流れがあり、そして鹿門山がある。これが孟大がここで見ていた風景だ。ここで孟大はいつも何を思っていたのか。

「兄上が間に合って下さって本当によかったです」。

弟が言う。

「明日にかい」。

「いえ、今日にです」。

弟は何も付け加えようとしな。自分はわかっているだけいなければいけない。

「で、これからどうすればいいのかい」。

「南園中堂に皆様方が集まる時刻になります。私は行かずにおこごと思っていました。ここでの仕事もありますし、行ってもどうすることもできませんから」。

「では、急ぐのかい」。

うなずく弟に、孟邕は、

「郊君はどうしているのですか」。

「中堂です。一人でどうするのか、私は見たくなかったのです」。

「郊君とは決まっていらないのですか」。

弟はこわばった表情のまま答えない。

「だったら、六郎兄さんが帰って来たと、郊君に知らせなければ」。

孟邕は即座に丘を駆け下る。

孟浩然は穴に向かって一礼する。

誰が孟大の後を継ぐのか、明日の埋葬の前に決めるのだろう。帰って来る

のが今日でなかったならば、孟郊ではなくなっていたのか。孟大に言おうとしていた言葉の行き先はどこなのか。

もう一度、鹿門山を見る。

山は夏の雲気に包まれている。白く淡く音もなく匂いもない雲気の中に、かつて張野人とともに歩いた道がある。それが一筋の道の始まりだった。

孟大に何も告げずに南園を出たのは何のためであったのか。五年の旅だけでなく、四十余年の間に、自分は何ほどのことをしたのか。そして、これから何をするのか。

愁いは尽きて意は多し。鹿門山は拒むことなく、自分の帰郷を迎え入れてくれた。それはすなわち、ここに生きよということであろうか。自分は謝靈雲でも阮籍でも陶淵明でもない。南園の孟浩然だ。ここに帰って来るべき理由がある。

銀色の筋が、ぽつと鹿門山から発せられ、雲気を買って上空へと飛び出る。輝きを増しつつ漢水の上を超え、真直ぐ南園の上空へ渡って行く。あれが一

筋の道なのか。

孟浩然は瞬時に知る。ただ一人の孟浩然が詠む詩は細く弱い。だから一筋の道は洞庭湖の上に消え、以来、姿を現さなかった。南園より生まれ出る詩があるのならば、大きく力強くそして明るさに満ちているであろう。張野人が二十年、三十年先になって生まれる詩と言ったのはそれだ。

孟浩然是丘を下って南園に向かう。

南園老は、衡叔平か邵平かではなかった。橘も植えれば、瓜畑も開き、立派な家も建てた。南園老が遺したものを、子孫は数十年にわたってひたすら食い潰した。

周囲の田畑よりも小高いところに、南園の人々の住居が寄り集まり、遠くからその中に二つの建物が目に付く。一つが南園で最も大きな南園中堂で、もう一つが、十年余り前に建てた孟演の邸宅だ。中堂は他の建物とともに古

びるに任され、孟演の邸宅は主人が孟郁に代わってからも常に手入れが施されて、周囲と馴染むのを拒むかのように、真新しいままで。

二つの建物の対比を改めて目にする孟浩然の歩みは遅い。孟大は数百の「忍」を書き連ねるような努力をしていた。孟大に代わって歩むとは、それを自分がするということだ。

丘の上で幾つかの指示を人々に与えてから兄の後を追った弟がじきに追い付いて横に並ぶ。

「手紙は、郊君に頼まれて書いたのかい」。

ぼそりと尋ねる。

「兄上にお帰りいただくのは、兄上には不本意であろうかと、郊君に訊かれました」。

「どう答えたのかい」。

「兄上はお帰りになれずにいるだけですと」。

「どうしてそう思ったのかい」。

「違うのですか」。

弟の驚いたような様子に、そうであったのかも知れないと考える。

「郊君はそう聞いて、手紙を書いてくれと言ったのかい」。

「一郎兄さんが病気であることは知らせしないでほしいと。書いた手紙を郊君に見せた後で、こっそり一郎兄さんのことを書き添えて封をしました」。

「そうだったのか」。

またしばらくして、ぽつりと尋ねる。

「一郎兄さんは、後のことは何もお決めにならなかったのかい」。

「書き遺されたものがあります。それをこれから開くのです」。

またしばらくして、ぽつりと尋ねる。

「母上はあれからよほどお年を召されたのかい」。

「今朝も、畑でお仕事をされていました」。

「この暑さでもか」。

「父上とそっくりのこともなさいます」。

「よもや、岷山を見てお立ちになるのかい」。

「お背中を叩くのは私です」。

「それは驚いた」。

「このようなことをおっしゃいます。『何を考えているのかまるでわからないのが二人もいたけれど、今ではわかるような気もする。一人は死に、一人は遠くにいるからだろう』」。

こらえる間もなしに涙が出ている。母のためにも、南園にいなければならぬ。舟の上にいた自分といまの自分はすでに違っている。

小さな坂を上る。

南園の家並みも、昨日も歩いたかのように変わらない。それでいて、異なる場所に誤って入り込んでしまったような違和感もある。ここは南園ではない別の場所であってほしい。

仔細に見れば五年前とそっくり同じではない。確実な速さで朽ち続けている。孟大は死に至るまで奮闘したのだろう。それでいながらこのありさまだ。自分がいない間に南園がよくなっていたら、どれほどよかったか。

旅の間に、隆盛へと昇り続ける世の姿を見た。孟郁の邸宅は、南園では例外でも、余所では普通だ。世の中に新しく変わらぬところはない。

静まり返った南園で、孟郁の邸宅だけに人々の賑やかな動きがある。

「昨日からあのようなのです。あちらの御主人が今日にもいらっしやるそうです」。

「郁殿はこれまでも南園に来ておられるのかい」。

「いえ、初めてです」。

塀の内から聞き覚えのある声が漏れて来る。

「酒癖の悪さは襄陽一だと、それだけが自慢の我輩に、これだけの酒を飲ませて下さるとは、こちらの旦那は実に剛毅だ。いやあ、有難い、有難い」。

孟大の父の孟敬規だ。

「叔父上は、何をしているのかい」。

「手伝うと酒が飲めるとかで、昨夜からです。大叔母様は大層怒っておられます」。

「酒のためなら何でもするとは叔父上らしい。まだまだ御壮健であるな」。

弟の手紙は孟郁の店の者が届けてくれた。孟郁は、今日ここに自分が到着すると知っていても不思議ではない。それで今日来るのだろうか。

角を曲がると、南園中堂が正面に見える。

中堂が完成した日、南園老は、襄陽の主だった人々を招いてお披露目をした。当時はこの界限では屈指の大建築だった。いまでは物の数にも入らず、塗りは剥げ、屋根の瓦はあちこちが割れ、南園の困窮をさながら示すものとなっている。

傾いた門をくぐる。中庭は凹凸だらけだ。

「中堂の一番奥に、一郎兄さんの棺が置かれています」。

自分の心を改めて確かめる。孟大に何を言うのか。

目指す中堂の扉が開き、一人の男が現れ出る。

「何だ、元気ではないですか」。

孟浩然は小声で言いそうになる。

孟大だと見えて、むしろ孟大ではない。孟郊だ。体の大きさからして父とは異なる。それでいて孟大に見えた。

階段を下って来る孟郊の顔に、かつてなかったものを認め、慄然とする。

かの丘に立っていた孟大にあったのと同じだ。孟大は元来は明るく大らかな性格で、誰からも好かれていた。年齢を重ねるにつれてすっかり変わった。

孟郊は、父が大きな体をすばませて歩くのを嫌っていた。孟浩然是一度目を閉じ、改めて孟郊を直視し直す。五年の歳月が孟郊をこのようにしたのか。

孟郊が真直ぐに懐の内に入り込んで来る。その背に腕を回わすと、孟郊は短く嗚咽し、次の瞬間に、身を翻す。

「お帰りなさいませ」。

「待たせてしまった」。

孟浩然の腹の底が火のついたように熱くなる。孟大ではなく楊義姉に見える。

「叔父上に御心配をおかけせずとも」

孟郊は言いさしたまま、肩を震わせる。

「どうやら間に合ったようだ」。

孟浩然是、その肩に手を置く。

孟郊はすぐに、

「お入り下さい」。

指し示す扉から孟邕が出て来る。

階段を昇り、孟邕の脇より中に入る。

「君は僕に大いに礼を言っていると思う。僕がいなかったら、六郎兄さんは、いまもってどこをふらふらしているのか、知れたものではないのですからな」。

孟邕はいつもの調子で孟郊に話しかける。

「逆でしょう。兄さんが叔父上を引つ張り回していたのでしょう。兄さんは、幾つになっても困った人です」。

孟郊もいつもの調子だ。

孟浩然は、回廊を横切り、もう一つの扉を押し開ける。

「僕はなんぞ困った人でも何でもありません。六郎兄さんには到底適いません。天台山だけでも、何回登ったり下ったりしたのか、数え切れないのですから。あつちにふらふら、こつちにふらふら、訳もわからずにさまざまのを、僕はずっと一人で面倒みなければならなかったのです。いいですか、箸の上げ下ろしから、何から何まで、僕がいなかったら、六郎兄さんは何一つできないのです。もうへとへとだったです。やっと帰れて、やれやれです。その点、君はいいですね。勝手知ったる故郷にずっといて」。

広間の内に入ると、二人のやりとりは聞こえなくなる。

中は薄暗く、むっとする暑さと、それに以上にむっとする匂いがある。匂

いの一つは香であり、別のもう一つの匂いが鼻を衝く。広間の奥の方がほんのり明るい。風を通すために左右の窓が開け放たれているのだろう。

壇があり、香の煙が上がり、その向こうに棺がある。左右にまばらに人がいる。中の暗さに馴れていない目には判然としない。誰であるかを見定めるよりも先に歩み出る。

孟大の棺があるという厳然たる事実を前にして、心の奥底でうごめいていた悲しみがほとばしり出る。都へと発ったとき、孟大と二度と会えなくなるとは思ひもしなかった。渦巻く感情の奔流に、丘の縁で考えたことなど押し流されてしまう。

楮先生の教えは心強い。死者に対する正しい礼のあり方の通りに体が動く。礼に適うことこそが最も自然であるのか。礼法通りに哭すと悲しみはいよいよ強まり、床にうづくまって動けなくなる。

孟郊が手を添える。

「旅から帰られたばかりでお疲れでありましょう。どうか、いま少しここに

いらしてください。じきに揃います。大切なことを決めるのです」。

孟大にはまだ何も告げられずいる。

「私は大丈夫だ」。

孟郊の手にすがって立つ。

「こちらがよろしいでしょう」。

孟浩然は示された場所を見て、悲しみの内から外に引つ張り出される。それは棺に向かって右側の二番目の席次。孟浩然の排行は六。従兄弟の中だけでも二番目ではない。南園には一世代上の人々もいる。

「そこでいいのかい」。

「そこでよろしいのです」。

孟郊が力を込めて言うのと、その声に被せるようにして、

「そこだろうと、どこだろうと、好きにするがいい。少しも言うことを聞きやしない。全く呆れたものだ。それで通ると思っっているのかい」。

甲高い声は霍大叔母だ。

孟浩然是振り返る。大叔母は席順に極めてやかましい。大叔母は向かいの三番目の位置にいる。

その前へと歩み、恭しく挨拶し、長く留守をした詫びを言う。

「ごちやごちや言わなくていい。これから大勢来る。一人が来るごとに、そうやって挨拶するつもりなのかい。そんな御丁寧なことをしてくれたら、そなたの挨拶だけで日が暮れてしまう。ただでさえ厄介になりそうなのに。さつさとあつちに行っておくれ。あそこがそなたの場所だって言う人がいるよ。うだから、それでいいと思うのだったら、あそこだって構いはしない」

大叔母は手を振ってあからさまに追いやろうとする。

孟浩然是もう一度頭を下げる。

大叔母の大きな体の蔭に辛氏がいる。孟大の弟の孟二の妻だ。辛氏が大叔母の隣で、四番目であるのは、何かの意味があるのだろう。辛氏を孟二の妻に迎えたのは、孟振、大叔母の夫婦で、以前から辛氏を目にかけている。

早くもそのようなことに気を回し、悲しむだけではいられない自分を残念

に思う。南園とはこのようなところなのか。

薄暗さに馴れた目で広間の内を見回すと、外に通じる扉の近くに、一族の若い者が数人いる。弟も孟篋もそこに加わっている。

「あちらの人々に挨拶して参ります」。

独り言のように口に出し、大叔母のもとから離れる。

大叔母は辛氏に顔を寄せてひそひそと話す。

孟郊は、

「私は父の近くにおります」。

大叔母との間を一つ空けて、第一番の席に就く。大叔母はちらりと振り返り見て舌打ちする。孟郊は孟大のただ一人の息子であるから、父の棺に最も近いそこでもいいはずだ。ただし、そこは南園の家督を継ぐ者が座る位置でもあるのだろう。

孟郊と大叔母の間には、大叔母の夫の孟振が来るのだろうか。南園老の孫でいまも健在なのは数人となり、孟振は最長老格といい。孟郊が孟浩

然に示したのはその向かいの席だ。孟郊の向いには誰が来るのか。自分が帰って来なかったら、自分の席とされた場所には誰が座ったのか。そのようなことに次々に思いを巡らせているのを再び残念に思う。

従兄弟や甥たちに向かって軽く挨拶をすると、当然のこととして、旅について訊く者がいる。小声で遠慮がちに尋ねるのに対して、孟浩然もささやくように、とりあえず当たり障りのない返事をする。重ねて尋ねる者もいれば、それで十分とすつと離れて行く者もいる。

生憎と孟邕という恰好の語り部がいては、それだけですむはずがない。私に任せなさいとばかりに孟邕がしゃしゃり出ると、学舎の仲間たちは待つてましたと水を向ける。言葉の洪水だ。

「少しの間も静かにできないのかねえ」。

大叔母が聞こえよがしにつぶやくのも、孟邕は知らん顔で、声は大きくなる一方だ。

扉が開いて一人二人と入って来る。孟浩然がいるのに気づいて会釈し、奥

に進んで棺に哀を捧げ、それから大叔母に丁寧な頭を下げ、自分の場所を尋ねる。すんなり座る者もあれば、子鬘の語りに引き寄せられるようにして集まって来る者もある。新たに来た人のために、子鬘は最初に戻って話す。人々は同じところを聞かされても、子鬘は少しく変化させてより巧みに語るので、繰り返しによって面白味が増す。

張説、張均、張九齡、王維、袁仁敬、賀知章と会ったと話し、その一人一人の振る舞いを真似てみせる。当人に似ているかどうかはわかるのは孟浩然だけなのだが、演じ分けがみごとで、いかにもそうかと思わせる。賀知章は都一番の大酒飲みで、その酔態を演じると、どうしても子鬘の父親に似てしまうので、人々はこれえられずに笑う。

「何をやっているのだ」。

大叔母は渋面を作る。

賀知章とは一転して気品あふれた話しぶりは王維。最も秀逸なのは張説の息子の張均。いかにも出来の悪いぼんぼんが鼻もちならない気取った態度で

意味不明のことを言うので、人々は笑い転げる。

「場所柄もわきまえず、騒がしいたらありやしない。全くろくなこつちやない」。

大叔母が怒りを爆発させると、さすがにそのときばかりはすつと静かになる。

しかし、すぐにまた話し出し、そのうちまた盛り上がってしまう。

「そうそう、都では、六郎兄さんは大変な甘蔗好きということになってしまいましたな。噛んでちゅうちゅう吸うと甘い味にする砂糖きびです。一時期は、下さるものといえば、誰も彼も甘蔗ばかりで、ほとほと弱りました。甘くて結構なものではありませんが、それだけで腹を満たすようなものではありませんからな。そもその始まりもやはり頂き物でした。何しろ、都での暮らしは、人様が下さる物だけが頼りでありまして、あるとき、米だろろうが豆だろろうが、食べられるものはすつかり食べ尽くしてしまつて、手元に残つたのは甘蔗だけ。それを後生大事に味がなくなつたものを未練にもちゅうちゆ

うしゃぶつておりましたところに、不意のお客様です。六郎兄さんは、そこで咄嗟にいらぬ見栄を張ったのですな、『甘蔗をしゃぶるとよい詩が浮かぶと聞きました、ちよつと試していただけます』とか訳のわからぬことを言つて、甘蔗を讃える詩まで御丁寧に詠んでみせたものですから、相手はすっかり真に受けて、それからは、六郎兄さんに詩を詠んでもらおうと思う人は、誰もが甘蔗を持つて来るといふ始末。甘蔗の束に囲まれ、その味ももう飽き飽きで、『漢水の鰻魚が恋しいのう』と、二人してばやくという、全く間抜けなありさまでしたな」。

子匱の話は行きつ戻りつして、いつまで経つても都を出るところまで進まない。

「どこにおる。我輩のところの、馬鹿息子が帰つて来たのか。どこだ。我輩のところの、親不孝息子はどこだ」。

素つ頓狂な声とともに孟敬規が入つて来る。

子匱は飛び上がるようにして父親の前に出て、

「これは、これは、我が南園の賀知章様のお出ましですな。相変わらず御機嫌麗しく、何よりでございます」。

腰を折って、下からくんくん嗅ぎまわる。

孟敬規はぐいと下唇を突き出し、

「馬鹿息子はここにおったか。御機嫌麗しいだと。馬鹿息子だけに馬鹿を言う」。

「たんまりお飲みになって、どこをどう見ても、御機嫌麗しい御様子ではありませんか」。

「たんまりは飲んだ。しかし、我輩は不機嫌極まりない。見てわからぬのか。馬鹿息子め」。

「おやおや、酒さえ入れば、我が親父殿は御機嫌でありましょうに。僕がない間に変わってしまったのですかな」。

「そうだ、親不孝息子のせいだ。『父母いませば遠く遊ばず』と、おまえは習わなかったのか。おまえが消えてから、我輩はずっとずっと不機嫌だった。

親不孝の馬鹿息子め。我輩を置いて、黙って出て行きおって、今さらどの面提げて帰って来た。不孝者の面を間近に見て、我輩の不機嫌はここに極まったぞ。

孟敬規は腕をぐるぐる回す。孟邕は大仰に頭を抱えて父親の前にはいつくばる。

「深く深く、心よりお詫びいたします」。

「この大馬鹿の親不孝者を、見せしめのために、折檻してくれようぞ」。

孟敬規は足を上げ、息子の被り物を蹴ろうとする。足は宙を蹴って、孟敬規がばったり倒れてしまう。

「何をやっているのだ。親が親だから、あんな息子ができる。全くろくなこつちやない。嫌だ、嫌だ」。

大叔母の声が響く。

孟敬規は息子にすがって立ちながら、

「いやはや、まことただいまの御指摘の通りであります。この親にしてこの

子あり。我輩が酒を飲んでこのさまでありますのは、いまさらどうすることもできません。平に御容赦願います。馬鹿息子の方は、旅で苦勞して少しはまともになつて帰つて来るのかと思いきや、『全くろくなこつちやない』と早速にお叱りを受けますとは実に言語道斷。親に似ぬ子になれとの親心も知らず、馬鹿者め」。

息子の襟首をぐいと掴み、

「長く留守した詫びをきちんと皆に言え」。
頭をぐいと下げさせる。

孟浩然が進み出て、

「二十二郎君を連れ出したのはこの私です。長く旅に出ておりましたのは、ひとえに私の勝手です。お詫びするのはこの私です」。

「兄さんか。兄さんはいいのだ。我輩は、遙か昔から言っておつただろう。南園に困り者が一人くらいはいいのだ。いや、二人はいいの。兄さんが一人で、この酔つ払いが一人だ。それでもう十分。この小さな南園に三人

は多すぎる。この馬鹿息子が三人目になるのは、我輩は断じて許さぬ」。

孟敬規は息子に馬乗りになり、大袈裟に頭を打つ仕草をする。まともに拳は当たっていない。

大叔母は、

「もう騒がしいつたらない。場所柄を少しは考えるがいい。一体どこで飲んで来たのだ、こんな日に」。

「どこでとお聞きでございますか。近頃の南園に、我輩をこれだけ酔わせてくれる酒がありますでしょうか。残念ながら、我が南園には、庫の奥のそのまた奥のそのまた奥になけなしの壺が一つか二つあるだけ。それを開くのでなければ、我輩を酔わせてはくれぬのです」。

「あつちの家に行つて恵んでもらつて来たのかい。全く賤しいつたらありやしない」。

「お言葉ではございますが、恵んでもらつたものではありません。きちんと仕事をし、その正当な報酬として頂戴したのです。そのお蔭で、先ほども言っ

ていた日頃の不機嫌をぐいと抑え付けまして、ようやくここに来たのです。酒の力がなかったならば、来られるものではありません」。

「だったら、来なくてもいいのに」。

「その通りです。しかし、この馬鹿息子が帰って来ましたからには、父親としてです、ぐいと抑え付けてやらねばなるまいと思ひまして、来ない訳にはいかなかったのです。この馬鹿息子の親不孝者をどうしてくれようか」。

孟敬規は立ち上がって、また蹴ろうとする。

「下らないことはもうよしにして、黙って、そこに座わってくれないかい」。

大叔母は人差し指の先で辛氏の次の次の場所を示す。

孟敬規は手で自分の口を塞ぎ、

「こう見えても、我輩は素直で物静かなのだ。そこでありませうか。そこに座ってよろしいのですか」。

示された場所までゆらゆらと歩み、そこに立ち止まってから、またゆらゆらと棺の前に進む。

他の人々と同じように作法通りのことを始め、不意に様子が変わる。両腕を上げて激しく哭し、泣きながらぐるぐるすると体を回し、声を嗄らし、ついには口から泡を吹いて床に崩れる。

最も近くの孟郊と、孟邕が走り寄って、孟敬規の体を抱えて席に連れる。叔父は大きく息を吐いて、がっくりとうづくまる。

「ようやく静かになってくれた。他の者も、いつまでそこでしゃべっているつもりなのかい」。

大叔母は手を打ち、決まった席へと人々を移動させる。

扉が開き、大きな体の孟振と、続いて孟二が入って来る。孟振は傲然と大股で床を鳴らし、その後ろで孟二は縮こまり、ずり足で棺の前へと進む。孟振は顎で孟二に合図し、並んで哀を捧げる。終わると、孟二の背を押し、辛氏と孟敬規に間に行かせ、座るのを見届けてから、大叔母の隣に座る。

続けて数人が慌ただしく入って来る。

それぞれしかるべきところにおさまって、孟浩然と孟邕が取り残される。

孟郊が先に示した場所には南園老の孫の一人が座っている。その隣の棺に最も近いところは空席のままだが、まさかそこという訳にはいくまいと見てみると、小さく手招きをし、隣の席を示す者がいる。子馨だ。気付かずにはいたが、ずっとそこにいたようだ。子馨の排行は七であるから、順序としてその隣は正しい場所である。子馨は扉に最も近い場所を選ぶ。

子馨の顔を見るとほととずるのはいつものことだ。

「君がいてくれてよかった。あとでゆっくり詫びと礼を言いたい」。
そつとささやく。

大叔母は、

「これで揃った。予期せぬこともない訳ではないが、それもよしとするよりあるまい」。

それは自分の帰還を言うのであろうと孟浩然は思いつつ、それとなく左右を見て、

「ここは四郎兄さんの場所ではないのかい」。

ごく小さな声で孟馨に尋ねる。

「いえ、兄上はここでよろしいのです」。

孟馨はさらに小さい声だ。

「では、始めるとしよう」。

孟振の声が響く。

弟の手紙に、孟四に対しては「鶴鴿 原に在り」とあった。鶴鴿は水辺の鳥で、それが原にいるとは、常の場所を失って危難にあるのを意味する。危難に遭った鶴鴿は、飛んでは鳴き、飛んでは鳴いて、仲間に救援を求める。鶴鴿は兄弟友誼のたとえとして古くから用いられる。孟四は苦悩の内にあるのだろうか。

孟振に促されて、孟二、孟郊、そして孟敬規が壇の前に並ぶ。亡き人との関係からして、この四人が、南園の最も重要な顔ぶれである。孟振は孟大の上の世代の長老格、孟敬規はただ一人健在な直系の叔父、孟二は一人だけの弟、孟郊は一人だけの息子だ。

香が盛大に焚かれる。死者を悼む儀式をしてから、南園の将来を定める重大事に及ぶのだろう。

南園老の後は、順に長男が継いで孟大に至った。孟郊は早くから、父の次には自分が継ぐとの自覚を持っていた。孟大が書き残したものがあるといいう。これまでは必ず生前に息子を指名していた。孟大はどうしてそれをしなかったのか。

孟郊ではない可能性はあるのか。順番としては弟の孟二ということもあり得る。しかし、孟二は南園老によって才能なしと見限られ、褚先生の学舎に入れてもらえず、実際のところ人前でろくろく口をきけず、いつもおどおどしている。南園を率いて行ける者ではない。孟二を後継者に仕立てて、孟振と大叔母が南園を経営して行こうと考えているのか。辛氏は、夫が長年冷遇されて来たのを、ここで見返したいと思っているのか。

そのような憶測をしている自分の心の動きを、孟浩然は、何ともやるせなく感じる。それでも考えは止まらない。

褚先生の姿はない。南園の次の主を決めるのに、褚先生の考えを聞く必要はないといえはないだろう。孟大は褚先生の最初の弟子であり、南園老が招いた先生であるのだから、ここに臨席くらいはしてほしいはずだ。体調が優れないのか。それとも、学舎に入るのを許されなかった孟二を後継者とする場に、褚先生にいてほしくないのか。孟振は、南園にとって学舎は荷が勝ちすぎるという以前から主張して来た。孟大の死をもって学舎を閉じるようなことになるのか。

孟敬規は何を思っているのだろうか。孟敬規も学舎は不要であると昔からの主張し、南園の現状に対する不満の多くは孟振夫婦と共通する。しかし、隔たりは大きい。孟敬規は南園老の時代を理想とする夢想家であるが、孟振夫婦は目の前の難しい問題を極めて現実に切り抜けて来た。

孟郁はここに来るのだろうか。いかなる意図をもって南園に来るのか。孟郁の出方次第では、南園の人々のそれぞれの思惑など吹き飛びかねない。孟郁の父の孟演は、従兄弟三人が心を合せるのを条件として支援してくれた。

孟郁には顧慮しなければならぬものなどないだろう。

自分はこの場でどうすればいいのか。孟大にはまだ何も告げていない。孟大でさえ苦勞してうまくいかなかったことを、自分が代わってできようはずがない。まして、一筋の道を南園に求めるなどというのは、夢の中で夢を見る以上に現実から遠く乖離している。

しかし、「間に合った」と言ってくれた弟がいる。自分の胸に跳び込んで来た孟郊がいる。

儀式は終わり、孟振が言う。

「箱に入っているものを開けるとしよう。いろいろあって、今日のいままで開けずにいた。このままではいつまでも定まらない。ここに皆が揃った。中を見ようではないか」。

香壇と棺の間に小さな台が置かれ、その上の小箱へと孟振が手を伸ばすと、脇から孟郊がそれを抑え、

「お待ち下さい。私がいいたします。父が私に託したものです」。

孟振は孟郊の手を払い除け、

「おまえが開けたいのか。それならそれで構わない。おまえがいつまでも開けようとしなから、開けたくないのかと思っていた。ならば、わしが開けようというだけだ。おまえが開けたいのなら開けるがいい。誰が開けたところで、中に入っているものは変わりはない。さあ、やってくれ」。

孟振は壇の前から離れ、孟敬規と孟二に席に就くよう促す。孟二は逃げるように自分の場所に飛び込む。

孟敬規は、

「どうにも息が詰まってかなわん。だから、来たくなつたのだ」。

ぼやきつつ座る。

孟郊は箱に手をかけ、そつと持ち上げる。一旦、香壇の上に置き直し、棺を押し、そのまましばらく動かない。

「よほど開けたくないのだろう。都合の悪いことが書いてあると知っているのか。何をぐずぐずやっているのだろう」。

大叔母のつぶやきはつきりと聞こえる。

孟郊は再び箱を手にし、額の先に掲げ、それからまた置き、紐に手をかける。

さつと背後が明るくなる。扉が開いて、差し込む光の中に人影がある。

「いまごろまた誰か来たのかい。どこの誰だろう」。

大叔母の声に、孟郊は紐をほどかずに手を離す。

扉が閉じられ、小さなざわめきが起こる。

「ああ、本当にろくなこっちゃない」。

大叔母の声が耳に入ったのだろう、

「呼ばれてもいない闖入者に、帰れとおっしゃるのであれば、そうもいたしましょうか。皆様方が揃ってそれを強くお望みのであるのなら」。

太い声が堂内に響く。

孟郊は振り返り、即座に進み出て、丁寧に会釈する。

「ようこそお出まし下さいました。初めてお目にかかせていただきます」。

孟郊にごさいます。今日の日にお越しくださり、亡き父に代わってお礼申し上げます。どうか、こちらにお通り下さい。」

「よろしいのですか」。

「父の棺に、香のひとつでも手向けていただければ有難い限りにごさいます。」
「では、そうさせていただきますし。宗家の御曹司であり、わしにとつては愛おしい甥、何よりも南園の主として畏敬すべきお方に、生前にお会いするのが叶わなかったのはまことに残念でありました。せめてこうして別れを告げるのだけはお許しいただきたい」。

孟郁だ。声も姿も父の孟演によく似る。

棺に向かつて歩む孟郁の堂々とした風姿は南園の誰もが適わない。

孟郁は香を焚き、

「貴公が生きている間に言葉を交わせなかったのは、いまさら言うのは無意味ながら、心残りである。貴公の苦衷をわしは誰もよりも知っているつもりでした。貴公とわしの間には大きな隔たりがあった。貴公と虚心に語り得な

かったのは、運命のなすところであつたのか。悔しさを口にするより、ただ一声、哭すべきであらう」。

一度だけ哭声を上げる。

孟郊に、

「これで、わしに帰ってほしいと思うのなら、そう言ってくれていい。この身を、無理にここに置く気はない」。

「南園にとつて大切なことに立ち会つていただけののなら、それに優る幸いはありません」。

「よいのかな、わしがいて。遠慮はいらぬぞ。邪魔なら邪魔だと言ってくれ」。

大叔母は、

「せつかくそうおっしゃっているのだから、そうしていただいたらどうなのだろう」。

そのつぶやきを、孟郊も孟郁も耳にしなかつたように、

「どうかこちらに」。

孟郊は自分が座っていた場所を勧める。孟郁は遠慮することなくそこに納まる。

孟浩然は、孟郊の振る舞いを見て、かつて孟大が「君の思う通りにできるように俺がする」と言ってくれたのと同じように、孟郊に対して言うのが自分の役目であろう考える。それ以外に自分にできるものはない。いまの孟郊は五年前の孟郊ではなく、つい先ほど孟大と見間違えた孟郊でもない。

孟郊は棺に一札をし、再び紐に手をかけ、蓋を開け、布の包みを取り出さす。額の上に捧げつつ向き直り、

「何かあったときに開けるようにと、父が入れたものがあります。幸いにも、ここには郁殿も叔父上も来られました。いまここで開けるのを父は望んでおりましょう」。

再び棺に向き、布を開き、折り畳まれた紙を手にし、

「では、開きます」。

孟大は孟郊を後継者に指名したのか。そうではあるまい。孟大は、自分の

考えを誰かに押し付けたことがない。息子にもしないだろう。

孟郊は紙を見つめ、

「読み上げます」。

声がわずかに震える。孟郊の呼吸の音が、孟浩然にもはっきりと聞こえる。

一語ずつ音を長く伸ばして朗誦する。

死徒無出郷　死ぬときも移るときも郷村から出ることがなく

郷田同井　郷村の田は井の字の形に整然と区切られ

出入相友　田に入るときも出るときも互いに友愛に満ちて

守望相助　不意の場合も互いに助け

疾病相扶持　病にも互いに扶助するならば

則百姓親睦　農民は親しみ睦むのである。

孟大が好んだ孟子の言葉だ。最後の「親睦」に至ってはほとんど涙声だ。

孟郊は静かに紙を畳み、布に包み、箱に納め、紐をかける。

「あれで終わりなのかい。いまは何を読んだのかい」。

大叔母が隣の辛氏に尋ねる。

孟郊は棺を拝してから振り返り、

「これが書いてある全てです」。

大叔母は、

「それでどういうことになるのかい」。

孟振は、

「よもやとは思うが、中に入れるのを間違えたのではないのか。手習いの紙か何かと」。

「父はこれを書き遺し、この一枚を入れたのです」。

「しかし、肝心のことが書いていない」。

「これより他に肝心のことがあるでしょうか」。

「孟子の言葉が我が一族にとって大切であるのは否定しない。それをここで読み上げてどうかなるのか。これから南園はどうなるのだ」。

「南園がどうかだったりすることはありません。我が一族は、孟子の教えを

受け継いで今日に至りました。孟子から我等まで千年、そして、これからの千年だって変わりはありません。父が死んだくらいで何ら変わりはないのです。

「孟子の教えを大切するのはいい。しかし、教えを奉じてさえいれればいいというものではない。南園とて、世間と没交渉でいられるのではない。理想を唱えて、それだけですむなら誰も苦勞はしない」。

大叔母も、

「おまえはまだ若く、南園の中のことしか知らない。昔の偉い人の言葉を引いてきれいなことを言って、それが一番いいように思っているのかも知れないけれど、現実の世間はそうではない。あたしは学者先生ではないから詳しく知らないけれど、孟子だって、世間の冷たい風に苦勞したのだろう。世間がろくでもないものであるのは一千年前もいまも変わらない。孟子はさんざん苦勞したからその言葉に重みがある。おまえのような世間知らずの苦勞知らずが、有難い昔の人の言葉を引いて、何も変わらないとかお氣楽なことを言

っていたのでは、ろくでもない世間にあつと言う間に呑み込まれてしまう。変わらぬどころではない。南園などたちまち跡形もなく消えてしまう。それくらいなのがわからないのかい」。

孟郊は、

「世の中が厳しく、南園を取り巻く状況がかつてなく悪いのを知らぬ訳ではありません。それでも、変えてはならないものがあるのを、孟子に学べと父は申しているのです」。

大叔母は、

「世の中がこれだけ変わって来ているのに、南園ばかりが昨日のままではいけない。亡くなった人のことを悪くは言いたくないが、この際だから、言っておくべきことは言っておかなければならない。南園老の時代から三代にわたって、何も変えまいとして来た。だけど、そのためにかえて南園は変わってしまった。第一に、規律というものがすっかりなくなってしまった。これまで通りでいいと言うだけで、漫然と成り行きに任せて来たものだから、

南園はいまはこのありさまだ。おまえの父さんは、気の毒にも一人で毎日駆けずり回っていた。だけど、それだけだった。南園から人が消えてしまうのさえ止められなかった。消えた連中がどこに行ってしまったのか、あたしは知らないけれど、確かにここに残るよりはずっとよかったのだろう。あたしはもうすぐ死ぬ年齢だから、これからどうなったところで構いはしないけれど、逃げ遅れて、最後の最後に南園が滅びるのに居合わせてしまう人は可哀想だ。千年とか偉そうにお言いただけけれど、十年はおろか、五年だって、もつかわかりはしない。本気になってここで変えるのか、そうしないでだらだら行くのか、どちらかを選ぶかいまは大事なときではないのかい。ここにこれだけの人が集まって、孟子の言葉を読み上げてもらって、はい結構でございます。これで終わるものではないだろう。あたしはそう思うのだけれど、これだけ大勢集まっているのだから、皆はどう思うのかい、さあ、誰か何か言ってくれないか」。

大叔母は立って両腕を広げ人々を促す。静まり返って応じる者はいない。

「どうしたんだい。遠慮しなくていい。皆に関わる大事なことだ。黙ってはいけない。これまで皆が黙っていたから何も変わらなかったのではないのかい。南園老から代々長男が継いで、他の者は口出しできなかった。それでは何も変わらないと絶望して、やむを得ず黙って出て行ってしまったのではないのかい。伝え聞くところでは、南園老自身は、その親から指名されて主になったのではないのだろう。立派な働きをしたから、皆が求めて南園老のもとに結束したのではないのかい。それこそが本来の南園の良き伝統だったと、あたしは思う。だから、ここでよく話し合って、南園をどうするのか決めたらいい。孟子の言葉を聞いて、まことに結構でございますと、変えずにおくので本当にいいのかい。あたしの考えは間違っているだろうか。どうなのかい。それについてどう思うのかい。誰も何の意見もないのかい」。

再び大叔母が促すと、「その通りだ」との声が幾つか上がる。

「皆でよく相談して、この南園を、明日からどうしていくのか、最もいい手を考え出そうではないか。誤解してもらっては困るのだけれど、あたしは、

あたしの考えを通そうと言っているのではない。あたしにも考えはあるけれど、それは、ここにいる誰もがそれぞれに考えることの一つでしかない。そのうちのどれがいいのか、皆でよくよく相談して決めたらいいと言っているだけなのだ。こうだと決めたら、南園は一つになる。皆で決めたのだから、一つになれるだろう。そうしないで、このままだったらと規律のない状態を続けて行ったら、南園はそっくり誰かに横取りされてしまうに違いない。それでもいいのかい」。

大叔母が言い放つと、堂内は張り詰めた空気になる。孟郁は斜めを見上げて全く動かない。

孟郊が急に二、三步進み出る。

「兄さん、頼みます」。

手を挙げ、孟邕に向かって言う。

「僕ですか。僕が、いまこの場面で何か言うのですか」。

「いえ、外です。外にお迎えに出て下さい」。

子鬮は振り返り、外の様子を探つてすぐに身を翻し、扉を開けて出て行く。

「おやおや、また誰か来たらしい。肝心なときになると邪魔が入る」。

大叔母は舌打ちする。

堂内の空気は緩むでもなく、張り詰めたままでもなく、中途半端に居心地の悪いものとなる。

子鬮はすぐに戻つて来る。脇を支えながら一緒に入つて来たのは楮先生。

一種異様な溜息ともつかぬものが人々より漏れる。

隣の子鬮がささやく。

「先生はこのところずっと伏せておられました。まさかここにお越しになるとは」。

かつてはその長身をいやが上にも強調するかのようぴんと真直ぐに伸ばしていた先生であるが、腰が折れ、頭上の丈高い冠が落ちそうなくらいに傾いている。

子鬮が駆け寄り、左右より腕を抱えられ、先生は風に揺れる草のようにゆ

らゆらと歩み、壇の前で崩れるようにして床に膝をつき、死者に向かって哭す。

声は先生としての威厳をなお保ち、

「生きて為すべきことが多くある者が先に死に、為そうとして為す能のないと知れた者がなお老残の身を曝しているとは、恨むべくは天道にあらずして、この我が身である」。

先生は胸を叩き、孟郊に向かって、

「孟大君に別れを告げたいま、今日を限りとして、南園を去ります。大君が生まれてこの地と呼ばれ、大君が亡くなってこの地を去る、それがこの身の半生でありました。かくあるこの身を恥じます。南園老殿が、私以外の誰かを招かれたならば今日のようなではなかつたでしょう。五十年前に私は、一頭の驢馬に跨り、わずかな荷を携えてここに来ました。驢馬はとうに死にました。荷も古びました。ただ一本の杖に身を委ねてここを去ります」。

先生は立ち上がりかけて足に力が入らず、孟鷺が抱くようにして引き上げ

る。

「そなたは旅から帰ったばかりであるか。見ての通り、一人では歩くことさえままならぬ情けない姿だ。御苦勞ではあるが、この老残の身を引つ提げて、また旅に出てはくれまいか」。

「先生のお言い付けであれば、どこへなりとも参ります」。

「望むらくは、かつて細い縁を頼りに身を委ねようとした楮遂良様が亡くなられた流刑の地。病んだこの身では、とてもそこまでは辿り着けないだろう。道の途中で死のう。それがこの私の定めであったのだ」

楮先生が踏み出そうとする腕を、孟郊は取りつつ、

「せめて、父が最後に遺したものを、御覧いただけないでしょうか」。

「何か遺したのか。南園と別れる前に、そればかりは見ておこうか」。

子盞と孟郊は、棺の右側のいまままで空いていた席へと先生を導く。

孟郊は箱を手に取り、先生の前で開いて、紙を先生の顔の前に掲げる。

「これであるか」。

先生は顔を近づけたり遠ざけたりしながら、目をしばたたかせる。薄暗いこの中堂の中で文字を読み取る力を先生の目は失っているようだ。

孟浩然是ここで立つべきかと思いつつ躊躇する。

紙には孟子の教えが記されていると、孟郊が先生に告げるであろう。それとも、自分が歩み出て告げるべきなのか。学舎において先生に最も可愛がっていたのは自分だ。南園から出て行くと言う先生を引き留めるのは自分の役目ではないのか。

長安の門の外で、南園には帰らずに洛陽に向かうと決めたときに、「時よ時」との先生の声が聞こえた。旅は先生の教えに反するようであり、先生の教えに従うようでもあった。先生にいま何を言えばいいのか。

わずかなためらいの間に、外から聞き馴れぬ音が堂内へと入り込んで来る。冷やかな目で褚先生を見ていた大叔母が、

「あれではないか。どうして、よりによってこのときに」。

一定の間隔で、じゃんじゃんじゃん金属を鳴らす音だ。銅の鉢を叩き合

わせているのか。音は少しずつ近づいて来る。

「あれは」。

隣の子皿馨に尋ねる。

「まこと、おいたわしいことです」。

楮先生の耳にもその音が達したのだろう。紙をそっと押しやり、

「それは後でまた」。

孟郊は元通りに包んで箱に納める。

じゃんじゃんじゃんと言音はいよいよはつきりし、先生は深くうなだれる。

太鼓と笛も聞こえる。

「全くろくなこつちやない。それも飛び切りだ」。

大叔母が言うのに呼応するかのようには、先生は呻き声を漏らす。

孟敬規が立ち上がる。

「ほら、ほら、いつもの始まりだ。さあ、さあ、いつも通りに祝いだ、祝いだ。こうなったら、祝宴の用意だ。陰気な葬儀はまた後だ。とにかく陽気に

やるしかない」。

孟嘗の肩を掴み、

「おまえは旅に出ているから知るまいが、これはいつものことだ。妙に驚いたりしてはならない。間違っても、悲しい顔をするな。我輩を見習え。盛大な祝いをする。こっちに来い」。

孟敬規は息子を引き連れて扉の前に行き、

「外の扉を開ける。わしはここを開ける」。

扉が開け放たれると、堂内が明るくなり、一層賑やかに音が流れ込んで来る。

「何が起こるのですか」。

孟浩然の問いに孟馨は、

「叔父上のおっしゃった通り、驚かず、悲しい顔もしないで下さい。決して止めたりしないで下さい。大変なことになります」。

一人の男がばたばたと駆け込み、声も高らかに、

「ただいま都より戻って参りました。南園の皆様方に、すばらしいお知らせでございます。状元でございます。みごと状元でございます。状元でございます。状元でございます」。

男は繰り返し叫んで堂内を巡る。

楮先生は身を振るるように動かして床に崩れる。

続けてもう一人の男が、

「ただいま都より、お坊ちやまがお帰りになりました。お坊ちやまは状元になりました。どうか皆様、我等南園の誉れでありますところのお坊ちやまを、歓喜の声とともにお迎え下さい」。

「これはどういうことなのか」。

孟浩然は孟馨に尋ねる。

「いま告げられた通りです。祝宴です」。

状元とは貢挙の首席合格者。貢挙の合格者が発表されるのは春だ。いまはその時期ではない。

銅鉞を両手に、じゃんじゃんじゃんと呼く男が入って来る。轟く大音響に、鼓膜が破れるばかりだ。続けて太鼓と笛も入って来て、ますます賑やかになる。

そして大きな幟が、先端からぐいぐいと入り込んで来る。斜めに掲げられた幟は金糸で縁取られ、朱色の文字が鮮やかに輝く。

「開元二十三年進士科以勝元及第襄州襄陽孟可及」

孟可及とは孟四の名だ。

幟がすっかり堂内に納まると、銅鉞、太鼓が一段と盛大に叩かれ、当の孟四が現れる。浅緑の官服を身に付け、腰に銀帯を佩いている。七品官の正装だ。

「万歳、状元様のお帰りだ」。

孟敬規が叫ぶ。

幟が皆の頭の上で左右に大きく振られる。

「万歳、万歳」。

孟敬規が叫び、

「おまえも言え」。

孟盩の頭を叩き、二人して、

「万歳、万歳」。

と、叫びながらそこらを駆け、皆が唱和する。

孟四は真赤な顔で、満面の笑みを浮かべている。

錦繡を纏った数人の男達が軽快に飛び跳ねながら入って来て孟四の前に並ぶ。楽器が盛大に鳴らされ、男達は舞踏を始める。近頃都で流行る西方由来の踊りに似て、南園ではかつてそのようなものは見たことがない。踊りが終わると、孟四はつかつかと中央に進み出て、

「私孟可及は、ただいま都をより帰って参りました。有難くも陛下より、進士及第を第一等で頂戴いたしました。これで皆様には御安心いただけます。我が南園の繁栄は永久に続きます。どうぞお喜び下さい。もつと嬉しそうにして下さい。もつと祝って下さい。ああ、そこには先生がおられるではありません」

ませんか。先生はどうして床に伏せておられるのですか。長年の御指導のお蔭でみごと状元になって帰って来たのです。有難うございます。有難うございます。先生のお蔭で、ついに状元を掴み取ったのです」。

孟四は褚先生の前にひざまずいて手を取り、

「先生、いかがでございますか。この広い唐土に数多の俊英がいる中で、この私が一番になったのです。どうかお喜び下さい。先生のお蔭で、こうなったのです。先生は喜んでおられますか。先生は褒めて下さいますか。先生はどうされたのですか。どうして何もおっしゃって下さらないのですか」。

孟四は褚先生の体を激しく揺する。その力が尋常でないために、先生の体が振り回されそうになるのを孟郊が懸命に抑える。

先生は嗚咽する。

孟四は宙を見て、しかし腕はゆすり続け、

「先生は泣いておられるのですか。嬉しいからですか。そうでしょう。私が状元になって、先生がお喜びにならないはずがありません。先生のお蔭でこ

うなつたのです。先生は喜んでおられますか。先生は褒めて下さいますか。弟の手紙にあった「鶴鶴 原に在り」とはこのことだったのか。孟四は常人とは異なる世界にいるのか。

先生は苦しげに、

「ああ、喜んでいる、喜んでいる。こんなに嬉しいことはない。よかった、よかった。褒めるぞ、褒めるぞ」。

孟四は飛び上がり、

「御覧下さい。私は先生よりお褒めの言葉を頂戴しました。我が生涯はこの一瞬のためにあつたのです。これまでの全ての苦しみも一切が消え去りました。我が心は晴れ晴れとしております」。

孟敬規が、

「さあ、さあ、祝宴だ。祝宴だ。陽気に、陽気に、祝うのだ、祝うのだ」。

楽器が盛大に鳴らされる下で、孟振がごく低く、

「そうせねばおさまらぬのだから、ここはやむをえまい」。

大叔母に向かつてつぶやきながら立ち、

「祝宴の用意を始めろ」。

指先で若い者数人を指名して外に走らせる。

孟敬規は、

「そうだ、速く行け。例のなけなしの酒を持って来い。それもあるだけ持ってきて来い。これ以上の祝いはないのだ。さあ、さあ、皆様方は揃って立ち上がり、声を合わせて、状元先生を祝福しようではありませんか」。

孟敬規の音頭で、皆が一斉に万歳の声を張り上げる。孟浩然もそれに従う。

孟四は、

「先生のお陰でこうなりました。私が皆の祝福を受けるのを、そこで御覧になつて下さい」。

孟四は先生を残し、踊るようにして、皆の前を一回りし、最も戸口に近いところの者の前に行き、

「やあ」。

と、祝いの言葉を求める。皆はすでに経験があるのだろう、順にそれ相応のことを言い、孟四はさも満足げに応じる。

孟四は一人一人の前に立って隣の孟馨に至る。孟馨は他の者と同じ祝辞を述べて、

「私ももつともつと勉強して、兄上のようになりたいと思います。どうか、これまで以上に厳しく指導して下さい。ぜひお願いいたします」。

「私が状元になったのもう安心だと気を抜かずに、君も南園のためにせいぜい頑張るがいい。君には才能はあるが、足りないところが二つある。一つは、君の性格だ。君は温厚すぎる。南園の中にとおさまっているのなら、温厚なのはまことに結構だ。君を嫌う者は少ない。だが、貢奉は激烈な競争だ。官界に入ればもつと激烈な競争が待っている。ただのお人よしでは競争に敗れてしまう。もう一つは、詩だ。君は詩が不得手だ。詩ができなければ、試験に合格できないし、官界での付き合いもうまくいかない。君の詩を読むと、こういうことを言いたいのだろうと、その気持ちはまあまあわかる。従

兄弟同士であるから、言葉足らずでもわかかってしまうのだろう。従兄弟であるところから離れると、君の詩は、君の性格に似て、穏やか過ぎて力がない。君は先人の詩をもっと読まなければいけない。詩だけでなく、もっと多くの書物を読まなければいけない。音律をよく学ばなければならない。南園の中で、自己流で自己満足で詩を作って得意になっているようではいけない。我が一族にも、詩で虚名を馳せている男が一人いる。あれはいかん。あれを真似てはならぬ。先生の教えを受けて、まともな詩を作らないといけない。君も、いま言った二つを克服したならば、状元まで望むのは難しくとも、合格するかもわからない。もっと聞きたいことがあれば、いつでも私のところに来なさい。よく励むがよい」。

孟四は両手で孟馨の頬を撫し、次に孟浩然と向き合う。

孟四は目をしばたたき、

「ほう、ここに立つのは誰であったか」。

孟四の視線は、正面の孟浩然を見捉えているようでいて、見当違いのどこ

ろに向かっているようでもある。

孟四はしばらく視線をさまよわせ、急にぎくりとして、

「誰かと思ったら、君は、もしかして。ああ、誰であったのか」。

孟四はまた見当違いのところ見て、

「誰でもよい」。

吐き捨てるように叫ぶ。

孟浩然は、努めて穏やかな声で孟馨とそっくり同じようにする。

孟四は、自分の顎鬚を強く引っ張り、

「その口のきき方は知っているような気がする。どうやら、思い出して来たようだ。そうか、そうか、そうであったか。君は、あるいは、あの虚名を馳せている、例の下手な詩を詠む弟ではなからうか」。

「まさしく、六郎にございます。不勉強のために、いまだに下手な詩を詠むことしかできていません」。

「どうやら、思い出して来たようだ。この頃は、君のその顔を見ていなかった

たような気がする。君はもしかしてどこかに行っていたのか。またぞろ、隠者を気取って、どこかの山にでも籠っていたのか。それとも、何に浮かれてか知らぬが、どこかで遊び呆けておったのか」。

孟四の表情は一定しない。怒っているのでも、悲しんでいるのでも、喜んでいるのでもない。

孟浩然の胸が締め付けられる。孟四がこのようなようになった理由は自分にもあるに違いない。

孟四は人差し指を孟浩然に向け、小刻みに動かす。返事を求めているのだろうが、どのように答えるのがいまの孟四に対して最もいいかわからない。すると、いつの間にか孟四が脇に来ていて、にゅっと首を出し、

「この六郎兄さんは、実は都に参り、お上にお会いになったのでございます。孟浩然は、

「何を言い出すのか」。

「事実なのでですから、隠さずともよいではありませんか」。

「ありもしないことを」。

孟浩然が怒ったように言うと、孟四はぐいと子壺に顔を近づけ、

「君は間違えている。お上にお会いしたのはこの私だ。断じて六郎ではない。曲江の宴はまことに華やかなものであった」。

孟四はそれをさも回顧するかのように天井を見上げる。

貢挙に合格した者は、皇帝が主催する曲江での祝宴に招かれる。状元の者には、宴において特別な役割が与えられる。

「世に名高い曲江の宴でございますか。その様子を、いかがでしょうか、よろしかったらお聞きかせいただけませんかでしょうか」。

子壺が言うと、

「宴の様子であるか。よからう。一生に一度のことだ。聞かせてやろう。どのような幸いで、君もその宴に連なることがないとも限らぬ。そのときに、うっかり恥でもかかぬように、あらかじめ聞いておくのも悪くはなからう。詳細に語って聞かせよう。進士科及第者は皆、曲江の宴に招かれる。中でも、

この私は状元であるからして、この私は」。

孟四はくるりと後ろを向き、背を丸めて額のあたり抑える。

「急に、ここに痛み走る。どうしたとか。これは、どういう痛みなのか。痛みのせいで、なぜかうまく思い出せない。お上の前に呼ばれた私は、それこそ、天にも舞う心地だった。それで、よく覚えておらぬのだろうか。この痛みがおさまりさえすれば、君に存分に聞かせてやれるのに、どうしたことだ」。

孟四は奇妙に笑い、

「宴のことは、そこに出た私にとっては先刻承知の話である。頭が痛いのに、無理をして思い出すまでもあるまい。それよりも、私の知らぬ耳新しい話を聞こうと思う。いま誰かがお上に会ったと聞いた気がする。それは誰だったのだ」。

孟四は振り返って、孟盞に指先を向け、

「君か。ありもしない作り話で、人を驚かそうとしているのなら、それはよ

した方がいい。嘘を話せば必ずぼろが出る。思い出せないなどと誤魔化そうとしても許さぬぞ」。

孟四は恐ろしい目つきで子匱を睨み、そのまま孟浩然を見る。

子匱は平然と、

「六郎兄さんですから、つまりは、詩の功名というやつです」。

「ほう、詩であるか。よもや、六郎の下手糞な詩を、お上がお御覧になりたいとおっしゃったのではあるまいな」。

「いやはや、その通りなのです。お上は、わざわざ、六郎兄さんが滞在している仏寺にお忍びでお出ましになりました。お上がお御足をお運びになったのです。それだけでも十分に驚きでありましょう」。

「出鱈目を言うな」。

「嘘偽りのない事実です」。

孟四は高らかに笑い、

「わかった、わかった。どうせ嘘を言うならとびきり大きい方がいいと、御

大層な話を作り出したのだろう。気の毒にも、君は、自分の詩があまりに下手糞なのに絶望し、二十二郎君に出鱈目の話を作らせ、それを自分で信じて、いい気になって酔っているだけなのだろう。大方そのようなところだろう。気の毒にも、君は詩で少しばかり名が売れ、しかし、実力がもとより伴わないものだから、苦しい思いをし、苦しきのあまり頭の中が妙なことになり、可哀想に、二十二郎君とともに嘘の話を作って、自分を慰めているのだろう。君はたぶん、嘘を嘘とは思っていないのだろう。それもまた気の毒である。私と君の仲であるから、気の毒な君のために、その虚妄な話に付き合ってもいい。私と君は従兄弟同士だ。私は君を嫌ってはいない。下手な詩しか書けない君のことを、私はずっと心配していた。君が詩で悩み過ぎてはいないかと、いつも気にかけていた。私のことを誤解しないでくれたまえ。

孟四はまた額を押さえ、

「しきりに頭が痛む」。

孟浩然は不意に浮かんで来た涙を拭い、

「兄上に申し上げます。私は二十年ばかり前に鹿門山に籠りました。好き勝手に詩を作りたかったからです。世間の人には、どこかしら珍しいと映ったのでありましょうか、いくらか評判になりまして、私はついうかうかと有頂天になってしまひまして、自惚れとはまことに恐ろしいもので、これなら都に行つても通用すると思ひ、のこのこ出て行きますと、どこでどう間違ひましたものか、私の詩の評判がお上のお耳にも達したのであります。どなたかが、よほどうまくお上にお話をされたのでありましょうか。それほどの才があるのならば、朝廷に召し抱えてみようかと、お上はお考えになり、恐れ多くも御自ら確かめようとされたのです」。

「どうせ下らぬ者がお上をたぶらかそうとしたのだらう。妙な下心があつてのことだ。似た話は昔からよくある。で、君はどうしたのだ」。

「二十二郎君の言いました通り、都のさるお寺で、呑気に遊んでおりましたときに、ある日、突如、お寺の皆様方が慌てふためいて右往左往の大騒ぎ。聞きますと、お上のお出まし。それは大変と、この身をどこかに隠さねばと、

寺の片隅に逃げ込もうとしますと、何と、お上は私をお召しとのこと。周章狼狽して、裏門から山に逃げ込もうとしまして、皆に取り押さえられ、お上の前に連れて行かれました。お上は、即座に詩を詠めとのおおせです。逃げる一心でいたものですから、動転してどうしていいやら大いに難儀しました。」「いついかなるときでも、即座に詩が詠めるようであればならぬ。君なんぞは、心構えがなっていないから、さぞ困ったであろう。同情するぞ。」

「苦し紛れに、どのようなお題でお詠みすればよいでしょうかとお尋ねしますと、お上はたちまち御不興の御様子。体が震えました。」

「全く度し難いとは君のことだ。お題をお尋ねしているようでは、お上のお心がまるでわかっていないと、自分から白状するに等しいではないか。それで終わりだったのか。」

「いえ、お上はまことに御寛大でありました。すぐに御機嫌を直され、詩題がほしいのならば与えぬものでもないとおっしゃって下さいまして、それで『歳晚』というお題を頂戴しました。」

「何かい、その話は年の瀬のことであつたのか。だったら、お上にわざわざお示しいただかずとも、『歳晚』で詠まねば駄目ではないか」。

「おっしゃる通りです。それで、歳晚、歳晚と心の内で考えていますと、これこそ自分の身の程を知らないということなのであります。自惚れとは実に恐ろしいもので、いい詩が作れそうな気がして来たのです。それで、たちまち思い付いた詩が、これこそは傑作だと思ひまして、自信満々で、一篇の詩をお上に御覧いただいたのです」。

「どのような詩だったのだ。言ってみろ」

「お聞き下さいますか」

孟浩然は静かに朗誦する。

北闕休上書 宮廷に政策を奉るのをやめて

南山帰弊廬 南山のぼろ家に帰ろうと思ひます。

不才明主棄 才能のない身は明君に棄てられ

多病故人疏 病いの多い身は友人からも疎んぜられます。

白髪催年老

白髪がむしろ老を催し

青陽逼歲除

日の巡りが歳の瀬を近づけます。

永懷愁不寢

あれこれ懷うと愁いのままに眠れず

松月夜堂虚

松にかかる月が夜の堂を虚しく照らします。

孟四は、

「ふむ。もう一回、言ってみろ」。

孟浩然は繰り返す。

孟四は孟浩然の両肩に手を置き、

「肝心なときに、一体君はどうしてしまったのだ。一生に一回あるかないかの好機ではないか。君は、そのときどうして私に相談してくれなかったのだ。」

私は春の貢挙を控え、年末には都にいたのだ。君のために私は力を貸すのを惜しんだりはしない。この詩ではまるで駄目ではないか。わざとお上の前で拗ねてみせて、お上の同情を引こうとしたのかい。どうしてそのようなことをしたのだ。お上に好まれないとわからなかったのかい。せつかくの好機を

自ら台無しにしてしまった。岳陽楼でもそうだった。失敗の経験をどうして次に活かせないのだ。君はどうしてそこまで不器用なのか」。

孟四は孟浩然の体を揺すり、

「残念だ。残念だ。残念だ」。

三回叫び、手で顔を覆い、そのまま楮先生への元へと歩み、どたりと床に座り込む。

「先生、どうか、あの六郎君をお許し下さい。勉強が足らずに、とんでもない失敗をしてしまいました。先生の弟子でありながら、この不始末をした六郎君をどうか許してやって下さい。どうかお願いします。六郎君が悪いのではなくありません。六郎君の相談に乗ってやらなかった私が悪いのです」。

今度は先生を揺する。先生はなされるがままに身を任せる。

そして両手を天井に上げ、

「我が南園はこういう運命だったのか。何と言う悲運だ」。

孟四はまた孟浩然の前に来て、

「で、不始末の結果はどうだったのか、皆にわかるように自分で告げるがいい。言ってみろ」。

怒鳴るように言う。

「兄上をこれほどまでに嘆かせてしまい、我ながら情けなく、申し訳なく思っています。私は、無思慮にも、お上の御憐憫にすがって出世を果たそうと考えてしまったのです。岳陽楼で張説様の前でしたのよりもさらにひどいものでした。お上は私の詩を御覧になりますと、即座におっしゃいました。『直ちにここから去れ。ここばかりでなく、都からも去れ。二度と都の内に足を踏み入れてはならぬ』。大層なお怒りようです。お上には謝罪する以外にないのに、『なぜでございましょうか』と訳を尋ねてしまいました。まだ自惚れがあったのでしよう。お上はこの上ない劍幕で、『朕はいつそなたを棄てた。そなたが勝手に仕えずにいただけではないか。』「明主に棄てられ」とは、朕を侮るのも甚だしい。そなたに才があるのか、不才であるのか、その見分けもできぬ朕だと思っておるのか。すでに十分にわかった。そなたは都には置けぬと、

朕はしかと見抜いた。かくて都から追い出されまして、恥ずかしさのあまり南園には帰れなくなり、旅の空でひたすら反省の日々を送ったのであります。身を根本から改めなければと、天台山に登って仏道の修行もいたしました」。

孟四は、

「無論、君には身を改めてもらわねばならぬが、君のしたことは、君一人のことではすまない。せつかくの機会を駄目にし、南園は立ち直る機会を失ってしまった。君が反省するのではすまない。南園は終わりだ。明主に棄てられたのは、君だけはなく、この南園もだ。もう絶望だ。皆も覚悟を決めるがいい」。

身を斜めにしてあたりを見回す。孟四はそのまま静止し、次第に息遣いだけが荒くなる。

その状況に一同が耐え難くなったところに、孟敬規が言う。

「そろそろ祝宴を始めましょうか。酒もおっつけ届くでありましょうから」。

孟四はびくんと飛び跳ね、

「祝宴だ、酒だ。祝宴とは何だ。いまは祝宴をするときなのか。私は知っておるぞ。いまは祝宴どころではない。気になるこの匂いがあるではないか。隠しようがない。誰かが死んだのだろう。見ろ、あそこに棺があるではないか。空の棺ではあるまい。中に入っているのだろう。誰が入っているのだ。誰なのだ。」

堂内にこだまする声に孟郊が答える。

「私の父です」。

「おまえの父か。それは誰であつたらうか。おまえの父か。そうか。一郎兄さんなのか。つまり孟大なのか。姓名を言えば孟誼か」。

「その通りです」。

「あれが死んだのか。あれが死んだのか。あれが死んだのか。死んだとしたら、どうしたらいいのか」。

孟四はゆらゆらと棺の前へ歩み、

「中に納まっているのは誰なのか。一郎兄さんなのか。誰か他の者が入って

いるのなら、違うと答えるがいい。おい、返事をしろ」。

孟四は応答がないのに苛立ち、

「返事がないのなら、一郎兄さんなのか。まさか、そうなのか」。

孟四は両手を上げ、

「一郎兄さんが死んだのか。本当なのか。だったら、我が一族はこれで終わりではないか。それでどうして平然としているのだ。諸君らは、事の重大さが何もわかっていないのか。なぜ泣かないでいる。悲しくないのか。私は悲しい」。

孟四は哭し始める。

その激しさのために、息が続かなくなつて、床に倒れる。

「困つたものだ」。

大叔母のささやきがはつきりと聞こえる。

孟四は床に転がったまま、

「誰だ、いまの声は。そうだ、その通りだ。困つたものだ。一郎兄さんが死

んで、これ以上に困ったことがあるのか。これは本当なのか。だったら、南園は終わりではないか。そうなのか。違うのか。一郎さんは本当にいないのか。一郎兄さんが死んで、誰が一郎兄さんの代わりをするだ」。

孟四はむつくりと起き、

「おい、誰なのだ。一郎兄さんの代わりを誰かができるのか。そんな人間がここににいるのか。それは誰だ」。

孟四の叫び声に答える者はいない。

孟四は堂内を一瞥し、俄かに大股で孟二の前へと歩み、

「兄上、あなたではないことだけは確かだ」。

怒気を含んだ声に、孟二は身を竦ませる。

「自分勝手に決めつけなくておくれ」。

大叔母が言う。

「このうるさい蛙をつまみ出すがいい」。

大叔母に拳を突き付け、もう一方の手で孟振の顎鬚をぐいと引き、

「断じてこの親爺でもない」。

大叔母はいきり立ち、孟振はぶるぶると顔を震わせる。

孟四はさつと身を翻し、棺に向かつて、

「ここには誰もいやしない。一郎兄さんの代わりは誰にもできない。初めからわかりきっている。南園はもう終わりだ」。

大叔母は、

「この狂人をいつまでここにいさせるのだ。早くつまみ出しておくれ」。

孟四は背を向けたまま、

「いま狂人と言ったな。狂人とは誰のことだ」。

「あんたに決まっているだろう。状元様のあるただ」。

「そうか、状元だ。思い出した。状元だった。状元であった。私は状元ではないか。だったら、何の心配もいらぬ。一郎兄さんが死んでも、何の心配もない。泣くまでもなかつた」。

孟四は高らかに笑い、一同の後ろに斜めに掲げられている幟の前進み、

その下に立って、

「開元二十三年進士科以榜元及第襄州襄陽孟可及」

と、読み上げる。幟を掴み、竿を引きずりながら再び棺の前に戻る。

「状元様だ。ここに書いてある。状元様だ。状元様は誰なのだ。状元様は誰なのだ。この私だ」。

幟を持ち上げて水平に構え、ぐいと竿を突き出す。先端が当たりかけ、大叔母は床に転げる。

「何をするのだい」。

「何をするのかだと。そんなことわかるものか。あんたが言う通り私は狂人なのだから」。

孟四は幟を縦に引き上げる。竿の先端が天井に当たる。

「見るがいい。孟可及が状元になった。孟可及が状元になった。孟可及とは一体誰だ。誰が状元になったのだ」。

幟を床に投げる。

「見るがいい。孟可及は狂人だ。孟可及は狂人だ。狂人は状元になれない。何だこれは。狂人を踏み潰せ。狂人を踏み潰せ」。

両足で幟をさんざんに踏み付ける。

「もう見ていられない。誰か、あれを何とかしてくれ。つまみ出してくれ」。大叔母の声に、孟四は、

「そうだ、私をつまみ出してくれ。頼むから、この私をつまみ出してくれ。この中堂から、この南園から、この襄陽から、どこか知らない遠くへつまみ出してくれ。後生だから、そうしてくれ。誰がそうしてくれるのか。ああ、そこにいるあの者か」。

孟四は褚先生を指差す。

先生は顔を覆って床に崩れる。

孟四は全く見もせず、孟浩然の前へと歩む。

「そこにいるのは誰だ。私をつまみ出してくれるのか。君はそこで何をしている。誰かと思ったら、何だ、君ではないか。君はいつからいたのだ。ちっ

とも知らなかった」。

孟浩然は静かに揖し、

「今朝、旅から戻りました」。

「ほう、旅から戻ったとな。とすると、君は南園からつまみ出されていたのか」。

「おっしゃる通りです」。

「それはうらやましい。それでどうして帰って来た。せつかくつまみ出されていながら、どうして帰って来たのか、こんな南園なんぞに」。

「一郎兄さんが亡くなったからです」。

「何だと、もう一度言ってみろ」。

「一郎兄さんが亡くなったからです」。

「一郎兄さんは亡くなったのか。そうか、私も聞いたような気がする。それで君は旅から戻ったのか」。

「その通りです」。

「今朝、戻ったばかりなのか。」

「そうです。」

「だったら、君は間に合ったのか。」

「そうだと思います。」

「そうか、君がいたのか。」

孟四は孟浩然に飛び付き、両腕で抱える。

「君がいたではないか。」

孟四は身を離し、孟浩然の肩をぐいと抑え、じつと顔を見据える。

「ああ、この君だ。君がいた。」

孟四は両腕を真直ぐに天井に突き上げる。そのままの姿勢でぐるっと十歩ばかり回って、

「万歳」。

と、一度叫ぶ。

「ほら、おまえたちも万歳と言え。」

孟四は万歳を叫びつつ、人々の頭を手当り次第に叩く。叩かれた者は万歳を叫び、叩かれまいとする者も万歳を叫ぶ。

孟敬規が同調し、孟四の横を飛び跳ねる。

孟四は孟浩然の前に戻り、

「君がいた。君だ。君以外にいない。君に全てを任せる。それでよい。よく帰って来てくれた」。

孟四は再び飛び付き、強く体を引き寄せる。孟浩然は身を任せる。孟四の拳が背中に食い込む。荒い息が顔にかかり、孟四の鼓動が伝わる。孟四とは、子供ころにも体をぶつけ合って遊ぶようなことはなかった。

孟四の肉体を初めて自分の身で感じ、深い悲しみに打たれる。孟四のこの体で苦しみを引き受け、そして引き受けきれなくなったのだ。

孟四の拳が背から離れる。孟浩然の体は解放される。孟四と向き合う。

これまでに見たことのない穏やかな笑みを浮かべていると思った次の瞬間に、孟浩然の頬が強く撃たれる。衝撃で孟浩然はよろける。

「おい、腑抜けた顔でいつまで黙っているのだ。返事をしろ」。

孟浩然が姿勢を立て直す間に孟四は歩み寄つてもう一度殴る。

「君に全てを任せると言ったのだ。どうして返事をしないのだ。これほど大事なこと他にあらうか」。

孟浩然は頬を抑える。痛みからじんわりと喜びが湧く。

「兄上のおっしゃる通りにします」。

「おお、そうか、そうしてくれるか。君は間に合った。我が一族に君しかない。自明のことだ。これで決まった。一郎兄さんの代わりは君だ」。

孟四は孟浩然の手を取つて棺の前に連れる。

「安心してくれ。兄さんの望む通りになった。この南園は六郎君が引き受けてくれた」。

孟四は棺に向かって言うと、孟浩然の背を強く打ち、

「さあ、兄さんの前で誓うがいい」。

大叔母が駆け寄る。

「二人して何をしている。任せるとか、決まったとか、勝手なことをお言いでない。この狂人を、誰か、外に連れ出しておくれ。さあ、誰か」。

孟四に体当たりする。孟四が振り向きざまに腕を払うと、大叔母の大きな体が床に転がる。

孟振が、

「誰かあれを取り押さえろ」。

応じる者はいない。

大叔母は床から起き上がり、

「全くろくなこつちやない。もう勘弁できない」。

大きな体を揺すつてもう一度孟四に突進する。

辛氏が飛び出て大叔母の腰を抑える。

「誰だい、あたしを止めるのは」。

「私です。私は、四郎兄さんのおっしゃる通りがいいと思います。いつもうちの夫を立ててくださり、とても有難く、感謝の言葉もあります。でも、

六郎兄さんがいらっしやるのでしたら、うちの夫は出るべきではありません。南園のためになるのなら、私もささやかながら身を捧げようと思っていきました。でも、六郎兄さんの邪魔になるようなことは決してたくありません」。「何を言っているのだ、この子は。この狂人の言いなりになって、この南園を滅ぼしてなるものか。あたしたちでなくて、誰ができると言うのか」。

孟四は奇声を上げる。

「狂人だ。私は狂人だ」。

幟を拾い、

「見ろ、状元様だぞ。状元様だ、状元様だ、状元様は狂人だ。状元様は狂人だ。狂人だ。狂人だ。狂人だ。狂人を侮るな。狂人を侮るな。狂人は知っている。狂人は知っている。よく見ろ、よく見ろ、ここには浩然の気が満ちている。浩然の気が満ちている。浩然の気だ。浩然の気だ。孟子だ。孟子だ。孟子は気が触れた。孟子は気が触れた。孟子は気が触れたのだ」。

孟四は幟を目茶目茶に振り回す。

泣き声が上がらる。

「もうやめておくれ。どうか、これ以上、私を責めないでおくれ。私はもう出て行くから」。

楮先生がよろめきながら孟四にすがる。

孟四はぴたりと止まる。幟を投げ捨て、先生の前にひざまずく。

「先生、お許し下さい。どうかお許し下さい。私は狂ってしまいました。この通り狂ってしまいました。私は孟子になってしまったのです。先生、申し訳ありません」。

「謝るのは私だ。私は、自分の使命だけを考えていた。そなたを苦しめ、このようにしてしまっただけだ。そなただけでない。南園をこのようにしてしまっただけだ。詫びたところでどうすることもできない。許しを請おうとは思わない。ここより去り、野に屍をさらそうと思う」。

先生はゆらゆらと歩もうとする。

孟四はその体を抱え、

「先生はどこに行かれるのですか。それは南園老がお許ししません」。

「南園老殿にどのように詫びたらいいのか。死んでも、あちらの世で、会わせる顔がない」。

「一郎兄さんがお許ししません」。

「出て行くのが遅すぎた」。

孟四は自分の頭を叩き、

「私は狂人だ。狂人は何もできない。狂人は先生をお引き止めできない。ああ、誰か先生をお引き止めしろ。誰がいる。そうだ。郊君だ。郊君はどこにいる。何をしているのだ。これは君の役目ではないか」。

孟郊はさっと進み出て、

「我が父は、先生にここにいて下さることを望んでいます。どうか私達を見捨てないで下さい」。

先生は悲しげに、

「もう私を見捨てておくれ」。

と、つぶやき、孟四と孟郊の間から抜け出ようと、しかし、足がきかずに倒れかける。

孟郊が支え、

「父の書き遺したものをどうか御覧になって下さい」。

先生は孟郊に抱えられながら、

「そうであった。それをまだ読んでいなかった」。

孟四は、

「一郎兄さんが書き遺したものがあのか。だったら、事は、最初から定まっているではないか」。

大叔母は、

「あれで事が定まっているものか」。

孟邕が来て先生の体を楽にさせる。その間に、孟郊は箱から紙を取り出す。

先生は紙に顔を近づけるが、やはり読み取れず、

「そなた、これを読んでくれまいか」。

孟四に渡す。

孟四はじつと目を注ぎ、得心したようにうなずくと、

「二郎兄さんも、私も、六郎君も、ここにいる誰もが孟子の子だ」。紙を孟郊に返し、静かに暗唱する。

死徒無出郷

死ぬときも移るときも郷村から出ることがなく

郷田同井

郷村の田は井の字の形に整然と区切られ

出入相友

田に入るときも出るときも互いに友愛に満ちて

守望相助

不意の場合も互いに助け

疾病相扶持

病にも互いに扶助するならば

則百姓親睦

農民は親しみ睦むのである。

先程までの叫びとはまるで違って、ごく穏やかな声だ。

「二郎兄さんは、孟子のこの言葉を選んだ。ならば、私はこう応じよう」。

君子有三樂

君子には三つの楽しみがあります。

而王天下不与存焉

天下に王として君臨することなどには関与せず

父母俱存

父母とともにいて

兄弟無故

兄弟の間に事もないのが

一樂也

第一の楽しみです。

仰不愧於天

上を仰いでは天に恥じることなく

俯作於人

下を俯いては人に恥じることもないのが

二樂也

第二の楽しみです。

得天下英才而教育之

天下の英才を得て教育するのが

三樂也

第三の楽しみです。

君子有三樂

君子には三つの楽しみがあり

而王天下不与存焉

天下に王として君臨することなどには関与しないのです。

孟四の声は晴れ晴れとしている。

「孟子は晩年になって三つの楽しみに到達した。私はこのような君子になれませんでした。後の者に託すしかありません」。

先生は両手で顔を覆ってすすり泣く。

「孟子を最もわかっていないのはこの私だ」。

孟四は先生の手を取り、

「南園の事はこれで定まりました。私には何の重荷もなくなりました。さあ、御一緒に旅に出ましよう。さあ、参りましよう」。

先生は涙の溢れる目で孟四を見る。

大叔母は、

「何をしているのか、さっぱりわからない。旅に行くのなら勝手に行くがいい。肝心なことがどこかに行ってしまった。あの二人が出て行ったら、最初からまた始めよう」。

孟四が、きつと睨み、

「肝心なことはもうすんだ。六郎君が引き受けてくれた。他に何がある」。

「いや、まだ何も決まっていない。あんたたちは、さっさと出て行っておくれ」。

大叔母が追いやるような仕草をすると、

「わしが見たところ、決まっておる。これでよい」。

太い声が響く。皆が一斉に孟郁を見る。

大叔母は、

「いまのはあなたさまでしたか。しかし、まだ決まっていないのです。南園の将来は私どもで決めさせていただきます。私どもです。どうか、そのことをお弁えいただきたい」。

孟郁は立ち、

「干渉する気はない。だから、黙って座っていた。わしとて南園老の孫の一人。南園がいかなることになるのか気にかかる。だから、じつと見ていた。南園の事がこれで定まったと見届けられ、わしは安堵した。もしも、改めて別のことを考えようとするのなら、わしはまだここにいなければならない。場合によって、干渉する気はないと言った前言を翻さなければならなくなるだろう。そのときは、相応の覚悟をしてもらわねばなるまい」。

「それはどういう意味でございましょうか」

「断固として我が道を突き進むということもあるだろう」。

大叔母はわざとらしく腰を低くし、

「我が道とおっしゃるのは何でございましょうか」。

「わしは父に託された。南園を滅ぼしてはならぬと。南園にかつての豊かさを取り戻す方策がわしにはある。それを直ちに行う気で南園に来た。初めて南園に来て、不思議なことに懐かしいと感じた。一度も見たことのなかった南園がどうして懐かしいのか。南園のことは父から聞いていた。それだけが理由ではないのだろう。わしは思った、わしの方策を実行すれば、南園はこれまででの南園ではなくなり、恐らくは、わしが懐かしいと感じた何かも消えるであろう。それで、この人たちがどのようにするのか、ひとまず見守ることにしたのだ。そして、わしは安堵した。もしも、改めて別のことを選ぶのなら、わしはここに来た当初の考え通りのことをする。南園が滅びるのを見るよりは、懐かしいと感じたものを犠牲してでも南園を建て直した方がよ

いからだ」。

孟振が立つて歩み出る。

「私とそなたとは従兄弟同士だ。ここは互いに遠慮しすぎずに思うところを言い合うのがいいだろう。先ほど四郎君が読み上げた通り『兄弟無故』が我が一族の良き伝統であった。我が一族は、孟子から一千年の間、孟子の教えを受け継いで、お互いに争うことなく一族の固い結束のもと、南園老の時代に至ってかつてない豊かさを実現した。我等、南園老の子孫は、その良き伝統を常を守ろうとして来た。ところが、誰かが悪いというのではなく、皆が一生懸命であったのにもかかわらず、様々な要因によってこの南園は衰えた。そなたに指摘されるまでもなく、南園はまさに滅びる直前にあるのだらう。このような事態を招き、南園老のみならず、孟子に遡るまでの一千年の間の先祖に対して申し訳なく思う。私は、南園の本来のあり方に戻ってここを建て直す方策をずっと考え、私なりに努力もして来た。他の者が引き受けたがらぬ嫌な役を私がしばしば担って来たのは誰もが知ってくれているはずだ。

私の父が南園老の長男として生まれなかったために、私には私の考えを存分に活かす機会を与えられなかった。そなたにはそなたの考えがあるようだが、私には私の考えがある。私はずっとここに生きてこのことを熟知している。同じく南園老の孫であっても、私でなければできないことがある。『兄弟無故』とは言うものの、そなたとは相容れないこともあるだろう。私はすでにこの年齢だ。私は私で、やはり断固として我が道を突き進まねばならない時が来たと思っている」。

「わしは、断固として我が道を突き進むことを留保して、ここで様子を見ていた。先ほど決まった通りであるならば、わしは留保を続ける。君も留保してくれるのならば、互いに同じ立場だ。争わずに、孟子から一千年の良き伝統は守れる。それでよいではないか」。

「まだ何も定まっていない」。

「浩然君が南園の主になる。確かにそう決まったとわしは聞いた」。

「狂人が言ったままで、意味がない」。

その言葉に孟四が反応しかけるのを孟浩然が止める。

孟郁は孟浩然に向かつて、

「わしの父は言っていた。南園老は、浩然の頼みを一度は聞いてやってくれと、父に言い遺した。父はそれに従った。父が死んで、父の商売を引き継ぐだけでも大変であったから、南園には触れずにいたかった。しかし、いよいよ滅びる瀬戸際に至っては来ない訳にはいかなかった。いまわしは、南園老が父に言い遺した通りのことをしたいと思っている。浩然君に会うのは初めでも、南園老の気持ちかなぜかわかるような気がするのだ。それで、浩然君に聞きたいことがある。それを聞いて、心を安んじられるならば、ここで決まったことを尊重するだけでなく、浩然君に力を貸そうと思う。それも惜しまずにだ。さあ、浩然君、わしに答えてくれるかい」。

孟郁に目を向けられて、孟浩然は孟郊を見る。孟郊が父の後を継ぐのが最もよいのに自分でいいのか。孟郊は小さくうなずき、安堵の表情を見せる。

孟浩然は心を決める。

「何なりとお尋ね下さい」。

孟郁は言う。

「ならば尋ねよう。この南園に生きる人びとの心持ちとはどのようなものであるのか、君の思うところを、君が得意とする詩で示してくれ。わしが懐かしいと感じたものは、恐らくはそれなのだろう。孟子の教えではなく、君の詩で聞きたい。小難しい詩はわしにはわからない。わしにもわかる平易な詩で示してくれ。わしは南園の心を知りたいのだ」。

孟浩然は一瞬のうちに心を決める。

「おっしゃる通りにいたしましょう」。

「そうか、そうしてくれるか。では、詩を思案する間、静かに待つとしよう」。

孟郁の威厳のある態度に、孟振も大叔母も逆らえず、人々はそれぞれ元の座に戻る。

孟浩然是棺の前に立つ。

南園の心とは何であろう。今日ここに帰って来て孟大に告げるべきことを

意外にも孟郁に問われたようだ。

目を閉じる。孟大は南園の心をどのように思っていたのか。それをこそ受け継がなければならぬ。

丘の縁のあの場所に、孟大となつて自分は立つ。前に鹿門山があり、右に南園があり、左に卜氏の瓜畑がある。丘の縁に射す日を感じ、吹く風を感じ、大地の匂いを感じる。鹿門山を包む雲気から一筋の道が延び、漢水の上空を渡つて南園に達しようとする。

孟浩然は目を開く。

「皆様も御存知の通りに、この南園の隣には卜さんの畑があります。先代のト老人は、岷山に連なる高台に畑を開き、瓜を植えました。年々工夫を凝らして、見事な出来栄えの五色の瓜が実るようになり、襄陽では、卜さんの瓜は、余所の瓜よりも高い値がつくようになりました。漢の都で評判になった東陵の瓜になぞらえて、それを南陵の瓜と言いましたよ。私はト老人を訪ね、このような詩を贈ります」。

樵牧南山近

私は岷山の近くで樵を拾い土を耕し

林閭北廓餘

林に囲まれた我が住まいは襄陽城から離れております。

先人留旧業

先人が旧くよりここを暮らしの場としたのです。

老圃作隣家

隣には菜園を営む老人がいます

不種千株橘

昔々この地にいた人に習って千株の橘を植えるのではな

く

唯田五色瓜

もっぱら五色の瓜を作っています。

邵平能就我

邵平先生ともいべきその老人に私も習おうと思いまし

て

開徑有蓬麻

草を払い道を開いてやって参りました。

孟浩然は詩を唱え終わると、再び目を閉ざす。

ト老人の瓜畑への道を歩む。前に岷山がある。岷山があるからには自ずと

父になる。母も時に父の真似をするという。二人になって岷山を見ていると、

岷山が言う。「ほら来ただろう」「何がですか」「興だ」。

背中を叩かれて、孟浩然是目を開き、

「私は、ト老人を見習いたいと思つてト老人を訪ねました。そして、帰り際に、『鶏と黍を用意してお待ちしていますから、今度は、南園にお訪ね下さい』とト老人に言いました。ト老人は『いずれその日が来たらな』と答えて下さいました。そして、ある夏の日の朝、今日こそがその日だと思つていまして、ト老人がふらりとお越しになりました。ト老人はしばし南園で過ごされ、お帰りになるときに、私に詩を贈つて下さいました」。

孟浩然是再び詩を唱える。

故人具鶏黍

旧くからの友人が鶏と黍を用意して

邀我至田家

私に迎えを寄越しましたので、田中の家にやって来ました。

緑樹村辺合

緑なす樹々が村はずれを囲んで合わさり

青山郭外斜

家並みの向こうに青い山が斜め突き出します。

開筵面場圃

筵を開いて畑を前にして

把酒話桑麻 酒を酌み交わして桑や麻の出来を話します。

待到重陽日 次は重陽の日になりましたならば

還来就菊花 またここに来て菊花のもとで楽しみの続きをしましょう。

自分の口から出たこの詩は一体どこから来たのか。まさしくト老人の詩なのか。

孟浩然是あたりを見回す。

ト老人を迎えた筵の上に座す。青い山並みが斜めに突き出し、田園の風景が広がる。その大地と天の間は、淡く白いものによって満たされている。浩然の気だ。その中を貫いて、一筋の広々とした道がある。無数の先祖がその道を歩いている。南園老もいれば父もいれば孟大もいる。道のどこかからか楊義姉の音がする。

「やっとわかりましたか。初めから何も巧まなければいいのです」。

そして張野人が言う。

「三十年、待った甲斐がありましたな」。

孟浩然は言う。

「このト老人の詩を聞いて、私は思いました。重陽の日といわず、いつでもト老人が訪ねて来ていただけのような場所で南園はあつてほしいと。それが、南園に生きる心でありましょう」。

孟浩然是堂の内に戻っている。

孟四が立ち上がる。

「君は下手な詩しか作れないと思っていた。いまのは君の詩ではあるまい。君の詩でないのならば、いまの詩を聞くことはなかった。いま私は詩を聞いた。ならば、いまのは南園が君の身を借りて歌ったのか。南園は、南園がかくあるのを望んでいるのか。君がその詩を詠んだということは、君が南園そのものであるのか」。

孟四は歩み寄り、

「私は旅に出る。もう何の心配もいらぬ」。

「兄上はここにいらして下さい」。

孟四の腕を取ろうとすると、さらりとかわし、

「私は狂人だ。先生とともに旅に出る。もう南園にはいない」。

孟四は先生に手を差しのべる。

先生は、

「私は一人でここに来た。出て行くのも一人でいい」。

「私は先生のもとより離れることはありません」。

孟郁が立ち、

「よろしい。わし浩然君の詩を聞いて安堵した。わしは明日には南園を発つ。

今度の旅は南方だ。わしが、先生を、褚遂良様がお亡くなりになった土地に

まで御案内いたそう。旅の間、先生には何の御不自由もさせません」。

「忝いお話です。しかし、この病身の世話を頼むのは申し訳ない。私一人で

旅には出なければいけない。私一人で」。

先生は立とうとして、体が思うようにならない。

助けようとする孟四と先生の二人の背を孟郁はそっと抑え、

「余計なことを申した。お二人ともこの南園にいらっしやるのが最もよい。いま浩然君の詩をお聞きなりましたでしょう。それでどうして南園を出て行くこうとされるのか。このわしでさえも、このまま南園にいたくなかった。初めて来た南園から離れたくない。しかし、わしがここにいたのでは、南園はこのままではすまない。だから、明日と言ったのを翻し、直ちに南園を去ろう」。

孟四は、

「南園の主は六郎君です。私たちが旅に出てよいかも六郎君に任せるべきでしょう。先生もどうかそうなさって下さい」。

楮先生は小さくうなずく。

孟郁は、

「それでよろしかろう。浩然君が、いまの詩の通りの南園にしたいと言ってくれるならば、お二人とも出て行く理由はなからう」。

孟浩然は、

「私にその思いが強くなります。しかし、実際に何ができるのか、まるでわ

かかっていません」。

孟郁は笑う。

「君は思うだけでいい。実際に君に何かができるとは、わしはこれっばかりも思っていない。ここにいる者だってそうだろう。君は南園にいるだけでいい。実際に何かをする者は他にいくらでもいる。ここにいる全ての者がそうだ。わしもその一人だ」。

孟浩然は孟郁に頭を下げ、

「どうか私にお力をお貸し下さい」。

「わしはここに来るのがはなはだ気が重かった。一度も見たことのない南園を父から託され、非常に重荷だった。わしも南園老の孫の一人ではあっても、生まれながらの商人で、南園の人々とはまるで違う生き方をして来た。わしは商人だ。南園がわしの商売の足を引っ張るようになっては困る。むしろ利益になってくれたらいい。父が生きていたころは、父の言い付けに従って商売をするだけだった。父が死んでからしばらくの間は、父が築いたものを守

るので必死だった。父を超えようとしたときに、全く意外なことに、襄陽の孟氏の端くれであることが役に立った。浩然君の親族であると言うと、それだけで信用してくれた。特に偉いお役人さんがそうだ。天下の人々は、浩然君の詩を通じて、襄陽を知り鹿門山を知っている。その孟家の人であるならば間違いないと思うらしい。わし自身よりも、浩然君の詩の方が信頼を置けるとは少なからず悔しくもあるが、都合のいいことは何でも利用するのが商売というものだ。いまの浩然君の詩を聞けば、南園の人々は、いまの世に稀な純朴な人々だとわかる。君は何もできないでいい。わしは詩を作れない。お互いに、利を分け合うのが商売というものだ。

孟郁は愉快そうに笑う。

孟敬規がふらふらと出て来て、

「よかった、よかった。ちようと祝宴の用意もできて、こんなにもいいことはない」。

手足を舞うように動かす。

大叔母は顔を歪め、

「何がよかつたものか。さっぱりわからない。ろくなこつちやない」。

なおも悪態をつくのを、孟振が抑え、

「思ってみれば、あの浩然は南園老が最も大事にした子だった。あれは変わり者で、勝手ばかりをして来た。あれは南園にとって特別な子だ。一度は任せてみるよりないのだろう。いたずらに揉め事を作るのは我が南園の伝統ではあるまい」。

辛氏も、

「夫は口下手で何も言えませんが、六郎さんの思いを共有している違いありません。どうか、六郎さんのもとに心を一つに合わせて下さい」。

二人の言葉に従うしかないのを大叔母は認める。

孟浩然は、

「私は詩を作っていればいいというのではないと思っています」。

孟四は、

「せいぜい下手な詩を作ることしかできない君に、それよりもましな何かができるだけでも思っているのかい」。

孟都は、

「言うまでもなく、この世にこの南園だけがあるのではない。我々がいかにここを大切に思っても、南園などは吹けば飛ぶような存在だ。南園を消してしまうのは簡単だ。ここにはここだけの匂いがある。ここに住む者はその匂いに慣れてしまつてわからなくなつていくのかも知れない。わしは初めて来たからそれを感じて懐かしいと思ひ、浩然君も長い旅から帰つて来たからそれを感じて、先ほどの詩が生まれたのだろう。その匂いは、広い天下にここしかないのだろう。孟子からの千年の伝統があつてこそ生まれる匂いだ。天下に一つくらいは、南園のような場所があつていい。吹けば飛ぶような存在の南園など、滅んでも天下の人々は何の痛痒も感じないのか。そうではない。浩然君の詩は南園があつてこそ生まれるものだ。南園が滅びれば浩然君の詩がなくなる。それは、天下の人々にとって大いなる痛痒だ。君は詩を作る以

外には何もできなくても、天下の人々は自ずと南園を助けてくれるであろう。わしはそのように思う。」

孟四は俄かに幟に飛びつき、

「どうしてこのようなものがあるのだ。」

両手で持ち上げ、壁に叩き付ける。

「状元など不要だ。六郎君がここにいないではないか。祝宴と誰かが言ったな。」

そうだ、祝いだ、祝いだ。鳴らせ、鳴らせ、叩け、叩け。」

銅鈸、太鼓、笛の音が起こる。

「踊れ、踊れ。」

孟四の叫びに、錦繡の男達が踊る。

孟敬規も混じり、

「踊れ、踊れ。」

子盃を焚きつけ、人々を煽る。

孟敬規と孟盃は大叔母に飛びかかる。

「やめとくれ」。

大叔母がわめくのも構わずに、

「さあ、皆も、やってくれ」。

孟敬規は周りを誘い、大叔母の体を操って無理やり踊らせる。

孟浩然は孟郊とともに、棺の前に立つ。

孟大はこの様子を見て何と云うだろうか。「俺はきつと支える」といまでも言うだろうか。

孟郁は踊りの輪の外にあつて扉へと歩む。孟嘗に促されて、孟浩然是その後を追う。

孟郁は、

「一つだけ言っておく。この南園が君の詩に反する姿にもしもなってしまうようだったら、わしは改めてわしの流儀を貫くことにする。わしが始めたならば、拒もうとしても無駄だ。わしはどこからでも南園を見ている。わしはどこにいても君が来るのを拒みはしない。もう二度と会わないのでも構わな

い」。

扉を開けて歩み去る。

ふとその後に従いたくなる。永嘉からの船頭はまだ川べりにいるはずだ。南園のことはこの人々に任せ、自分は旅に戻る。

一筋の道は南園にある。そこを離れてどこに行くのか。

陶淵明に習うのでもなく、阮籍に習うのでもなく、謝靈運に習うのでもなく、南園の孟浩然は南園に生きる。

■示孟郊

孟郊が何かの事情で孤立したときに、伯牙と鐘子期の故事を引いて励ました詩。伯牙の琴の調べは衆人には理解されず、ただ鐘子期だけが称賛した。

蔓草蔽極野

蔓草が野を覆いつくしてしまっても

蘭芝結孤根

蘭草や靈芝はひとり根を地中に結んでいます。

衆音何其繁

たくさんの音が騒がしく生じるなかで

伯牙独不喧

伯牙の琴ばかりは静かな音色で

当時高深意

高くまた深い心を表わしていたのを

举世無能分

世の人々は誰も聞き分けることができず

鐘期一見知

ただ友人の鐘子期だけが理解し

山水千秋聞

山水の永遠の音として聞いていました。

爾其保静節

君はその節を静かに保てばよろしく

薄俗徒云々

薄へらな俗人にはがやがや言わせておけばいいのです。

■ 上張吏部

開元十六(七二八)年、長安滞在中の詩。張説の子の張均に差し出した。

公門世緒昌

あなたさまの家は世々功業がさかんである上に

才子冠裴王

あなたさまはあまたの名族の中でも冠たる才人でありま

出自平津邸
還為吏部郎
神仙余氣色
列宿炳輝光
夜入南宮靜
朝游北禁長
時人水鏡窺
明主賜衣裳
翰苑飛鸚鵡
天池待鳳凰
承歡儔日顧
未紀後時傷

す。

宰相様の邸宅よりお出になつて

まずは吏部員外郎の任にお就きになり

神々しいばかりの皇城に入られ

綺羅星のごとき光輝を放つておられます。

夜には南の宮殿で静かに過ごされ

朝には北の陛下の近くに長くお控えになります。

鏡の如き明察を人々に讃えられ

陛下からは立派な衣裳を頂戴します。

官署では鸚鵡のように拔きん出た文才を示され

宮中のお庭では鳳凰のような気品溢れる振る舞いをされ

ます。

お上にお仕えする人々はあなさまを日々に見て

まだひと月にもならないのにもう後塵を拝するのを恐れ

ます。

去去凶南遠

さらに雄飛しようときれるあなたさまが

微才幸不忘

この私めをお忘れにならずにいて下さいましたら幸いです。

■ 秦中感秋寄遠上人

開元十六（七二八）年秋、長安滞在中に遠上人に贈った詩。遠上人は廬山の東林寺の僧で、かつて廬山のあたりを旅したときに知り合ったのだらう。

一丘常欲臥

故郷の丘に隠れていたいと常に思いながらも

三径苦無資

帰郷の道には難しく苦しいものがあります。

北土非吾願

北の都は吾が願いの場所ではなく

東林懷我師

東の林におられる先生を懐きます。

黃金燃桂尽

財は都の物価の高さに尽き果て

壮志逐年衰

壮志も年を逐って衰えました。

日夕涼風至

日に夕に涼しい風が吹きますと

聞蟬但欲悲

蟬を聞いてただ悲しむばかりです。

■李氏園臥疾

開元十七（七二九）年春、洛陽の李某の邸宅で病に伏せた詩。

我愛陶家趣

ここに陶淵明の田園の趣きがあるのを愛します

園林無俗情

園林は俗ぼさがまるでなく

春雷拆百果

春の雷とともに数多の草木が開いて

寒食四隣清

四方のどこもが清々しい季節となりました。

伏枕嗟公幹

昔むかしに劉楨が病を理由に官に就かなかった故事に嘆息し

帰山羨子平

山に入って帰らなかつた向子平を羨みます。

年年白社客

私はこうして白社の地の客となつて

空滞洛陽城

空しくいつまで洛陽城に留まっているのでしょうか。

■ 自洛之越

開元十七（七二九）年秋、洛陽からの南方への旅に出る際の詩。

遑遑二十載

三十年の人生をおぼつかなく過ごし

書劍両無成

書も剣も両つながら成就するところがありません。

山水尋吳越

これより吳越の山水を尋ねようと思います

風塵厭洛京

長安洛陽の風塵を厭うのです。

扁舟泛湖海

小さな舟を水に浮かべ

長揖謝公卿

手を掲げて皆様とお別れいたします。

且樂杯中物

さあ、杯の中の酒をこそ楽しみましょう

誰論世上名

世間に知られる名などを言うのはもうやめにします。

■ 建徳江宿

開元十七（七二五）年秋、舟の旅を続け、建徳江に停泊した詩。

移舟泊烟渚　舟を動かして淡く煙る渚に泊めると

日暮客愁新　日が暮れて客愁が新たに湧きます。

野曠天低樹　野はどこまでも広く、天が低く樹に触れます

江清月近人　江はあくまで清く、月が人に近づいて来るのです。

■ 将適天台留別臨安李主簿

開元十八（七三〇）年初夏、臨安から天台山に行こうとして、李主簿の見送りを受けたときの詩。

枳棘君尚棲　君はなお棘のある枝の中のような世間に棲んでいます

匏瓜吾豈繫　私はもうぐずぐずとはしていられなくなりました。

誰念離当夏　よもや、旅立つのが夏になって

淡泊指炎裔　もえる暑さの船路に出るとは思いもしませんでした。

江海非墮游　江海に行くのは墮落した遊びに陥るのではなくても

田園失帰計

故郷の田園に帰るすべはありません。

定山既早発

定山を朝に早くに発して

漁浦亦宵濟

宵には漁浦にまで行けましょう。

泛泛随波瀾

泛んで泛んで波に随い

行行任艫柂

行きて行きて艫に任せれば

故林日已遠

なつかしい林は日々に遠くなり

群木坐咸翳

天台山の木々は自ずと翳ります。

羽人在丹丘

羽のある仙人は丹丘にいると聞きますので

吾亦従此逝

私はここより行こうと思います。

■ 歳暮海上作

開元十九（七三二）年暮れ、南方の海岸地帯を旅しての詩。

仲尼既云没

孔子は中国では道が行われないと海に泛ぼうとしてこ

で死に

予亦浮于海
私もまたここから海に泛びます。

昏見斗柄迴
暮れて北斗七星の回るのを見て

方知歳星改
まさに新たな歳が来るのを知ります。

虚舟任所適
舟をただ行くに任せるばかりで

垂釣非所待
釣をして太公望のように天子様に見出されようとは思いません。

ません。

為問乗查久
それでいかだに長く乗って

滄洲復何在
海上に浮かぶ理想に地はどこにあるかと問うのです。

■ 除夜楽城逢張少府作

開元十九（七三二）年の年末に楽城で張子容に会ったの詩。

雲海泛鷗閑
雲の海が浮かぶこの地に

風潮泊島浜
風と潮の寄せるこの海辺に泊りますと

何知歳除夜
いかなることでしょうか、この除夜に、

得見故郷親

故郷の親しい人と会うこととなりました。

予是乗桴客

私は筏に乗る旅人としてここに来て

君為失路人

君は不遇の人としてここにいます。

平生復能幾

人が生きるのはいかばかりのことでしょうか

一別十余春

一別以来、十余りの春が過ぎました。

■ 永嘉別張子容

開元二十(七三三)年春、永嘉で張子容と別れての詩。

旧国余帰楚

この旧い国より私は西に帰り

新年子北征

この新たな年に君は北に行きます。

掛帆愁海路

帆を掛けて海路に愁い

分手恋朋情

手を分かって友情を恋います。

日夕故園意

日に夕に故郷を思いますと

汀州春草生

水辺には春の草が茂っていきます。

何時一杯酒

この次はいつになるでしょうか、一杯の酒を

重与李膺傾

李膺ともいべき君と再び傾けるのは。

■ 歸至郢中

開元二十(七三三)年夏、江南の旅から襄陽に帰る途中の詩。郢州は襄州の南東二百十一里。

遠游経海嶠

遠く海辺に遊んでから

返棹帰山阿

棹を返して山のもとへと帰って来ました。

日夕見喬木

日の夕べに木々を見ますと

郷関在伐柯

それは都からの南路に当たる我が故郷のものです。

愁随江路尽

愁いは江の路に随って尽きましたか

意入郢門多

意は郢門に入ってからも多くあります。

左右看桑土

左右の桑畑や田畑を見れば

依然即匪他

もとのままのはらからの住まうところです。

■ 南山与ト老圃種瓜

南山、すなわち岷山のもとで、老農のト氏と瓜を植えた詩。

樵牧南山近　私は岷山の近くで樵を拾い土を耕し

林間北廓餘　林に囲まれた我が住まいは襄陽城から離れております。

先人留旧業　先人が旧くよりここを暮らしの場としたのです。

老圃作隣家　隣には菜園を営む老人がいます

不種千株橘　昔々この地にいた人に習って千株の橘を植えるのではな

く

唯田五色瓜　もっぱら五色の瓜を作っています。

邵平能就我　邵平先生ともいうべきその老人に私も習おうと思いまし

て

開徑有蓬麻　草を払い道を開いてやって参りました。

■ 過故人莊

知人の田園の家を訪ねた詩。

故人具鷄黍 旧くからの友人が鷄と黍を用意して

邀我至田家 私に迎えを寄越しましたので、田中の家にやって来まし

た。

緑樹村辺合 緑なす樹々が村はずれを囲んで合わさり

青山郭外斜 家並みの向こうに青い山が斜め突き出します。

開筵面場圃 筵を開いて畑を前にして

把酒話桑麻 酒を酌み交わして桑や麻の出来を話します。

待到重陽日 次は重陽の日になりましたならば

還来就菊花 またここに来て菊花のもとで楽しみの続きをしましょう。